姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第92集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第388次発掘調査報告書―

2020

姫路市教育委員会

序

姫路市の中心部に位置する世界遺産･国宝姫路城は、別名「白鷺城」とも呼ばれ、関ヶ原合戦の功により播磨52万石の大名になった池田輝政が、慶長６年（1601）から同14年にかけて主要部を築いた平山城です。標高45.5mの姫山に本丸が配置され、周辺の武家屋敷や町屋などを含めて城下町全体が内堀･中堀･外堀の三重の堀で囲まれていました。このたび、発掘調査を行った北条口三丁目は、外堀と中堀の間に挟まれた外曲輪に位置し、付近には町屋･社寺･下級武家屋敷などが配置されていたとみられています。

姫路市の中心部は昭和20年（1945）の姫路大空襲により壊滅し、戦後に施行された土地区画整理に伴い市街化が進んできましたが、近年の発掘調査により城下町の遺構が地中に良好な状態で残存していることが明らかになりつつあります。今回の調査で見つかった遺構及び遺物は姫路城下町の成立及び変遷を解明する上で貴重な資料です。ここにその成果を報告し、今後の調査･研究の進展に資する所存です。

末尾になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました事業者様をはじめ関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

令和２年（2020年）３月
姫路市教育委員会
教育長　松田　克彦

例言・凡例

1．本書は、姫路市北条口三丁目44、45において実施した姫路城城下町跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、和田興産株式会社から委託を受け姫路市教育委員会が実施した。調査は姫路市埋蔵文化財センターの南憲和が担当した。報告書の執筆･編集は南が行った。
3．発掘調査に関する写真･図面等の記録及び出土品は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
4．本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標系Ⅴ系であり、方位は座標北を示す。標高値は、東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
5．土層図の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局･財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』に準拠した。
6．遺構記号は、文化庁文化財部記念物課発行『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』(2010)に依拠した。

目　　次

第１章 第１章　はじめに…… 1
第２章 調査の成果
　第１節　調査の概要…… 1
　第２節　近世の遺構・遺物…… 1
　第３節　中世以前の遺構・遺物…… 4
第３章 総括…… 5

挿図・挿表目次

図１　SK12-2･SE05から出土した玩具
図２　第374次調査との合成図
表１　出土遺物観察表

図 版 目 次

図版１　周辺の遺跡／調査位置図／調査区配置図
図版２　近世の遺構全体図／中世以前の遺構全体図
図版３　調査区西･南壁断面図
図版４　調査区東壁断面図
図版５　SD06･SD13平面図／SD13断面図
　SK28･SK37断面図／SD06断面図
図版６　SD08･SD09平面図／SD08遺物出土状況図
　SD08断面図／SD09断面図
図版７　SD06･SD08･SD09出土遺物
　SE01･SE05出土遺物
図版８　SK28･SK33･SK37平面図
　SK28･SK33断面図
図版９　SK28出土遺物
図版10　SK16･SK17･SK22･SK23･SK27平面図
　SK16遺物出土状況図／SK17･SK22･SK23断面図
図版11　SK16･SK17-2･SK23･SK33出土遺物
図版12　SK22出土遺物
図版13　SK17-1･SK42･SK29･SK30出土遺物
図版14　SE01･SE02･SE03平面図／SE01断面･見通し図
　SE03断面･見通し図／SE04平面･断面･見通し図
　SE05平面･断面･見通し図
図版15　SD02平面図／SD01平面図／SD01･SD02断面図
図版16　SD07･SD10･SD12･SD14･SK35平面図、SD14出土遺物
図版17　SD07断面図／SD10断面図／SD12断面図／
　SK35断面図／SD10･SD12･SD14断面図
図版18　遺構写真(1)
図版19　遺構写真(2)
図版20　遺構写真(3)
図版21　遺構写真(4)
図版22　遺構写真(5)
図版23　出土遺物写真

第１章　はじめに

姫路市北条口三丁目44、45において共同住宅の建築工事が計画された。計画地が姫路城城下町跡（県遺跡番号020169）に該当することから、文化財保護法第93条の規定に基づき事業者から平成30年1月25日付で埋蔵文化財発掘届出書が提出された。姫路市教育委員会では平成30年2月21日、遺構の残存状況を把握するために確認調査（調査番号：20170503）を実施した結果、遺構及び遺物を検出した。これを受けて事業者と協議を行い、施工により遺構の破壊を免れることができない556.31㎡を対象に本発掘調査を実施することになった。平成30年4月2日付で事業者と協定書を締結し、発掘調査を開始した。現地調査（調査番号：20180006）に要した期間は、平成30年4月3日から6月8日であった。現地調査終了後、整理作業及び報告書の作成を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。本発掘調査の開始から報告書の刊行までの体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会		文化財課		埋蔵文化財センター	
教 育 長	松田克彦	課　　長	花幡和宏	館　　長	前田光則
教育次長	名村哲哉（～平成31年3月）	課長補佐	大谷輝彦	課長補佐	岡﨑政俊（庶務）
	坂田基秀（平成31年4月～）	技　　師	黒田祐介（～平成31年3月）	係　　長	森　恒裕（調整）
生涯学習部		技術主任	関　梓　（平成31年4月～）	技術主任	南　憲和（調査）
部　　長	岡田俊勝（～平成31年3月）				
	沖塩宏明（平成31年4月～）				

第２章　調査の成果

第１節　調査の概要

城下町絵図等の史料によると調査地は姫路城の外曲輪南東部に該当し、北条門からは約300m北に位置する（図版1）。第一次榊原時代（1649～67）の絵図によれば、調査地周辺には北を正面とする2軒の武家屋敷が描かれている。続く第二次松平時代（1667～82）の絵図では東を正面とし、さらに第二次本多時代の元禄15年（1702）以降とされる絵図では、再び北向きの屋敷が現れるなど、当該地の土地利用については変化が激しい。酒井時代（1749～幕末）には調査地は南北に並んだ武家屋敷地2区画に跨り、その両区画の出入口は東向きに開口していたことが窺える（註1）。

調査地の現況地盤は標高12.5m前後であり、明黄褐色シルト質粘土の地山が東端部では12.3m、西端部では12.1mで現出した（図版3・4）。地山の上位には近世城下町及びそれ以前の土層が存在したと想定されるが、近代以降の攪乱が著しく、これらの可能性のある土層は調査区西壁にわずかに確認される程度であった（図版3の調査区西壁①－②）。西壁では12.35m付近で三和土の一部を確認したため、この高さが近現代に攪乱を受ける前の地盤高であったと考えられる。遺構は地山面において、溝14条（SD01～14）、土坑46基（SK01～46）、井戸5基（SE01～05）、柱穴（ピット）74基を検出した。このうちSD01・02・07・10・12・14、SK35は遺構の切合い及び出土遺物等からみて中世以前に属すものとした（図版2）。

第２節　近世の遺構・遺物

出土遺物から遺構の大半は近世以降に属すとみられる。このうち、遺物が一定量出土するなど主要な遺構について報告する。

（１）溝

SD06（図版5・7・19）　調査区南東部で検出した。SD14を切り、SK28に切られる。幅1.1～1.2mを測り、主軸方向N-17°-Eで直線的に7.5m以上延びる。南端は調査区外へ続く。北端は不明だがSK28を越えて延びる

ことはない。検出面からの深さは33～50㎝を測り、断面は箱状を呈す。調査区南壁付近では上層から中層にかけて人頭大の円礫が集中していた。遺物は土師器皿(図版7－1・2。以下、遺物番号は通し番号のみ記載する。)、備前焼徳利（3)、肥前系施釉陶器碗（4)・皿（5)、丸瓦（6）のほか図化に耐えなかったが、瀬戸美濃焼志野の細片が出土した。これらの時期は17世紀前半頃に属すとみられる。

SD08（図版6・7・19）　調査区の中央部で検出した。SD07を切り、SK12-2、SK22、SK23、SK27、SK33に切られる。幅1.0～1.3mを測り、主軸方向N-71°-Wで直線的に23m以上延びる。西端は調査区外へ続く。東端は攪乱を受けているが、調査区東壁では確認されなかったため調査区内で収束する可能性が高い。検出面からの深さは約45㎝で、底のレベルは11.4m前後で一定しており、検出部の東端と西端の間では明確な高低差は認められなかった。断面はU字状を呈す。埋土の観察から、底付近に質の異なる土層が幾重にも薄く堆積した後、人為的に一気に埋められたとみられる。このような形態から区画溝の可能性がある。遺物は肥前系施釉陶器小壺（7)、備前焼擂鉢（8）のほか図化に耐えなかったが須恵器甕、平瓦の細片が出土した。8は断面aの1層から出土した。出土遺物及びSK33との先後関係からみて17世紀中頃までに埋没したとみられる。

SD09（図版6・7・19）　SD08から南に2.2m隔てて併行する。SD01、SD07、SD10、SD12、SK37を切り、SK28に切られる。幅1.5m前後で直線的に延びるが、西端は調査区中央部で収束し、東端もSD06までは続かないことから、延長は約10.0mと推測される。検出面からの深さは約20㎝を測り、断面は皿状を呈す。西端部及び断面ｆライン付近には底に拳大の礫が集積していた。西端部では礫の上位に長径20㎝程度の横長の石が中軸線上に6石並んでおり、礫の集積はこの石列の基底部に伴うものと考えられる。遺物は土師器皿（9・10)、肥前系施釉陶器皿（11)・向付（12)・碗（13）が出土した。このうち9は礫の集積内から出土した。これらの時期は17世紀前半頃とみられる。

SD13（図版5・19）　調査区北東部で検出した。幅0.6mを測り、主軸方向N-17°-Eで直線的に2.9m以上延び、北端は調査区外へ続く。検出面からの深さは30㎝を測り、断面は箱状を呈す。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。しかし、SD06の延長線上に位置し、埋土も類似することから、一連の溝を構成する可能性も否定できない。

（２）土坑

SK37（図版8・20）　調査区の東部で検出した。SD09、SK28に切られる。東西50㎝以上、南北40㎝以上、深さ26㎝を測る。全体の形状は不明である。内部は径10㎝大の円礫で充填されていた。遺物は出土しなかった。

SK28（図版8・9・20）　調査区の東部で検出した。SD06、SK37を切り、SK33に切られる。東西2.5m、南北2.3m、検出面からの深さは100㎝を測る。底部はほぼ平坦で断面形は箱状を呈す。遺物のうち土師器皿(14)、焼締陶器擂鉢（15・16)、青花皿（17)、肥前系施釉陶器皿（18・19)、白磁仏飯具（20）は上部の1・2層から出土した。このほか、土師器皿（21)・炮烙（22)・羽釜（23・24)、肥前系施釉陶器碗（25)・鉢(26)・皿（27)、焼締陶器鉢（28)・壺（29)、丸瓦（30）が出土したが、出土層位による遺物の組成に顕著な時期差は認められず、17世紀前半から中葉頃に収まるとみられる。

SK16（図版10・11・20）　調査区の西部で検出した。長軸1.15m、短軸0.36mの細長い形状を呈し、検出面からの深さは14㎝を測る。底部付近で施釉陶器皿（31)・染付磁器碗（32）が出土した。

SK17-2・SK23（図版10・11・20）　調査区の西部ではSK17-1～3、SK22、SK23、SK27が集中していた。調査の進行に伴いSK17-3に切られる西側をSK17-1、東側をSK17-2とし、さらにSK17-2に切られる南側をSK23としたが、これらの埋土は色調・土質とも近似しており、現地調査ではそれを個別に識別し発掘することが困難であった。遺物の混入の可能性を排除できないため、ここではSK17-3を挟んだSK17-1とSK17-2・SK23に分

けて報告する。便宜上SK17-1については後述する。

SK17-2は長軸2.6m、短軸0.7mの細長い形状で、検出面からの深さ40cmを測る。SK23はSK27を切り、SK17-2、SK22に切られる。SK23は南北1.25m、東西1.42m、検出面からの深さは24cmを測り、炭・焼土を含んだ土で埋め戻されていた。SK17-2・SK23から土師器皿（33）・炮烙（34）、肥前系染付磁器碗（35）・皿（36）が出土した。

SK33（図版8・11・20）　SK28の北に位置しSD08、SK28を切る。南北2.70m、東西2.45m、検出面からの深さは70cmを測る。断面は箱状を呈す。遺物は土師器皿（37）・炮烙（38）、関西系焼締陶器擂鉢（39）、肥前系施釉陶器碗（40・41）、施釉陶器皿（42）、肥前系染付磁器碗（43）・皿（44・45）、磁器小杯（46）、白磁皿（47）が出土した。これらの時期は17世紀後半から18世紀前半に収まるとみられる。

SK22（図版10・12・20）　SK23、SD08を切る。長軸2.35m、短軸1.08mの細長い形状で、断面形はU字形を呈す。検出面からの深さは69cmを測る。埋土は3層に分層できたが、1層と3層で接合する遺物があったため、一気に埋め戻されたと考えられる。遺物は土師器皿（48・49）・堝（50）・炮烙（51）、関西系焼締陶器擂鉢（52・53）、陶器灯明皿（54）・碗（55～57）、備前焼徳利（58）、染付磁器小碗（59）・碗（60～65）・猪口（66）・皿（67）・蓋（68）・水滴（69）、軒丸瓦（70）、寛永通宝（71）が出土した。このほか2層を中心にハマグリ・サザエ等の貝殻が220g出土した。このため、これらの遺物は食料残滓とともに一括廃棄されたと考えられる。時期的には18世紀後半頃を中心とするものとみられ、染付磁器に広東碗や端反碗を含ないことから18世紀末までは下らないと考えられる。

SK17-1（図版10・13・20）　SK17-3に切られる。南北2.7m以上、東西1.4m以上を測り、北西部は調査区外に延びる。検出面からの深さは31cmである。遺物は土師器皿（72）・炮烙（73）、関西系焼締陶器擂鉢（74）、施釉陶器碗（75）・鉢（76）、染付磁器碗（77）、青磁火入（78）、丸瓦（79）が出土した。

SK42（図版2・13）　調査区南東部で検出した。SE05に切られる。遺物は関西系焼締陶器擂鉢（80）、桟瓦（81）が出土した。

SK29（図版2・13）　調査区中央部で検出した。南北1.0m、東西0.8m、検出面からの深さは10cmを測る。遺物は染付磁器蓋（82）・碗（83）のほか、図化に耐えなかったが染付磁器のくらわんか碗、施釉陶器土瓶が出土した。83は端反碗であり、19世紀前半頃のものとみられる。

SK30（図版2・13）　SK29の東側で検出した。南北2.1m、東西1.6m、検出面からの深さは25cmを測る。遺物は土師器炮烙（84）、染付磁器小碗（85）・碗（86）、土製品（87）が出土した。86は瀬戸焼の端反碗であり、19世紀前半頃のものとみられる。

SK18（図版2・20・23）　調査区の北部で検出した。西半は攪乱により失われていたが、南北1.8m、東西は残存長で1.5m、検出面からの深さは25cmを測る。遺物は、染色体状の文様を施した染付磁器碗に共伴して剣酢漿紋の軒丸瓦、石製硯等が出土した。幕末頃のものとみられる。

SK12-2（図版2・20・23）　調査区の中央部西寄りで検出した。南半は攪乱（戦時中の防空壕）により失われていたが、東西2.3m、南北は残存長で2.6m、検出面からの深さ約90cmを測る。遺物は、染付磁器広東碗・端反碗、施釉陶器堝等のほか、玩具の一種とみられる施釉陶器の蛙形の製品（図1-91）が出土した。幕末頃のものとみられる。

図1 SK12-2（左）・SE05（右）から出土した玩具

（3）井戸

SE01・02・03（図版7・14・21）　調査区の南西部で検出した。切合い関係からSE02→SE03→SE01の順に新しくなる。SE01は瓦組井戸で井戸側の径0.8m、掘方の径2.2mを測る。井戸側瓦（88）は凸面に「>」字状

の切り込みが縦に4列連続する形で設けられていた。井戸側内からタイルなど現代の製品が出土した。SE03は石組井戸で径1.0m、掘方の径1.8m、検出面からの深さは1.4mを測る。調査した範囲内では石組基底部の胴木や水溜施設は確認されなかった。遺物は柿釉を施した土師器細片等が少量出土した。SE02は長径1.2m、短径1.0mの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.25mを測る素掘りの井戸である。遺物は図化に耐えなかったが、施釉陶器土瓶等が少量出土した。出土遺物からみてSE02の埋没は江戸時代後期であり、それ以降にSE03→SE01と作り替えられたと考えられる。

SE04（図版14・21） 調査区の北東部で検出した石組井戸である。SK39（図版2）を切る。井戸側の径0.9m、掘方の径2.5mを測る。深さは検出面から2.25mまで調査し、石組の基底部で胴木を検出したが、湧水が激しく崩落の危険を伴うため、それ以下の掘下げを停止した。遺物は石組検出レベルより上位で染付磁器・平瓦等が少量出土した。SE04の構築時期はSK39から柿釉を施した土師器皿の細片が出土したことから江戸時代後期以降と考えられる。

SE05（図版7・14・21） 調査区の南東部で検出した石組井戸である。SK42を切る。井戸側の径0.9m、掘方の径2.6mを測る。深さは検出面から3.4mの石組基底部で胴木を検出し、その下部に縦板組の水溜施設を据えていたことを確認したが、湧水が激しく崩落の危険を伴うため、それ以下の調査を停止した。遺物は石組検出レベルより上位で瀬戸焼端反碗、井戸側内から玩具の一種とみられる土製芥子面（図1-92）、石組の基底部から底部に穿孔を有する丹波焼甕（89）が出土した。出土遺物からみて幕末以降に埋め戻されたとみられる。

第３節　中世以前の遺構・遺物

（１）溝

SD01（図版15・22） 調査区を北西から南東へ斜行する。SD07・SD14を切り、SD02に切られる。北西はSD02に切られるが、南東端は調査区外に延び、検出部の総延長は23.5mを測る。幅20～30㎝、検出面からの深さは15～30㎝で、断面はＵ字状を呈す。遺物は出土しなかった。

SD02（図版15・22） 調査区の北西部で検出した。SD01を切る。検出部の延長10.5m、幅1.6mを測り主軸方向N-15.5°-Eで南北に直線的に延びる。北端は調査区外に続き、南端は近世遺構及び攪乱坑に切られる。検出面からの深さは34㎝を測る。断面形は椀状を呈し、底付近には水流の痕跡と認められる砂質土が堆積していた。遺物は土師器細片以外に出土しなかった。

SD07（図版16・17・22） 調査区の中央部で検出した。SK35を切る。検出部の延長12.9m、幅1.35mを測る。主軸方向N-23°-Eで直線的に延び、北端は攪乱を受けているが、南端は調査区外に続く可能性が高い。検出面からの深さは30㎝を測り、断面形は椀状を呈す。遺物が出土しなかったため、時期は特定できないが、N-23°-Eの軸線は飾磨郡の条里方向とほぼ一致する。

SD10・12・14（図版16・17・22） 調査区の東部で検出した。SD10は延長18.7m以上、幅72～110㎝、SD12は延長13.2m以上、幅50～70㎝で、検出面からの深さはともに最大20㎝前後を測る。SD10・12ともに北東から南西方向にやや湾曲しながら延びていた。SD10の北端は攪乱により不明であるが、SD12は調査区外に続くことが東壁で確認された。SD14は延長10.4m以上、幅1.0m以上、深さ45㎝を測る。底付近では水成堆積層とみられる砂質土を確認した。SD10・12・14は調査区の南東隅部で交わっていた。切合いの有無を断面h～jで確認した結果、埋土に差が認められなかったため、これらは併存していた可能性が高い。遺物はSD14の底付近から弥生土器の高杯（90）・凹線文を施す壺の細片等が少量出土した。

（２）土坑

SK35（図版16・17・22） 調査区の中央部北寄りで検出した。SD07に切られる。長軸1.4m以上、短軸0.7mの不定形な形状で、検出面からの深さは40㎝を測る。遺物は出土しなかった。

第３章　総括

主な調査成果を以下のとおり整理し、まとめとしたい。

① 調査地は絵図等から姫路城外曲輪に位置し、酒井時代（1749～幕末）には南北に並んだ武家屋敷地2区画内にあたるとみられ、両屋敷の正面が最終的に東向きに固定されるまでは、北側の屋敷地は北を正面とした時期があったと想定された。今回の調査では、屋敷地区画等の変遷を明らかにすることはできなかったが、17世紀中頃までに埋没する溝（SD06・SD08・SD09）が存在したことは注目される。

② SD07と同じく城下町以前に属し飾磨郡の条里方向と概ね一致する溝としては、調査地の北西15mの地点で行われた第374次調査で検出された2-SD02が挙げられる（図2）。2-SD02は15世紀代には機能しており、城下町の街路とほぼ直交することから、城下町の地割の「条里ライン」は中世の地割を踏襲している可能性が指摘された（註2）。SD07の検出により、城下町以前の条里方向に規制された遺構が周辺に広がる可能性が高くなった。

③ 近年の播磨国総社の三ツ山大祭の調査で「宿村絵図」（英賀神社蔵）が紹介され（註3）、中世の宿村と国府寺村の境界線が調査地周辺に想定されている（註4）。仮に両者の村境に何らかの区画施設が存在した場合、方向・位置的にSD02・SD07及び第374次調査の2-SD02がこれに相当する可能性がある。

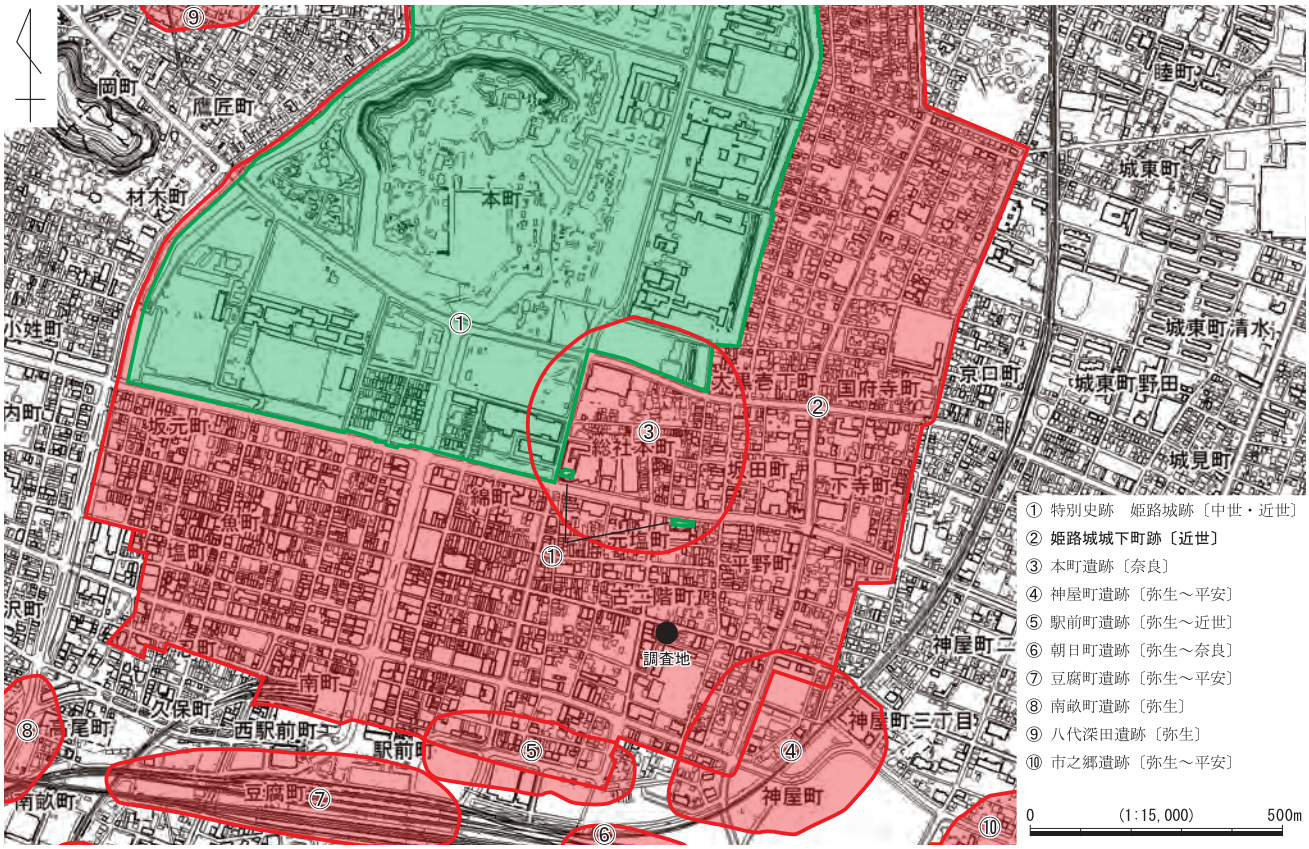
（註1）　酒井時代の文化3年（1806）には北側の区画に「武井五郎右衛門」、南側の区画に「石原富吉」が居住していたとみられる。なお、安永9年（1780）石原甚助の跡を継いだ冨吉は玄米6石17俵5斗3人扶持の武士であったとされる（姫路市立城郭研究室所蔵「安永年中さむらい帳　古イ」（酒井家資料C3-1）による）。
（註2）　姫路市教育委員会 2018 『姫路城城下町跡－姫路城跡第374次発掘調査報告書－』 姫路市埋蔵文化財センター調査報告第61集
（註3）　姫路市教育委員会 2015 『播磨国総社三ッ山大祭調査報告書』
（註4）　兵庫県立歴史博物館 2019 『特別展図録「お城ができるまでの姫路」』

図2 第374次調査との合成図

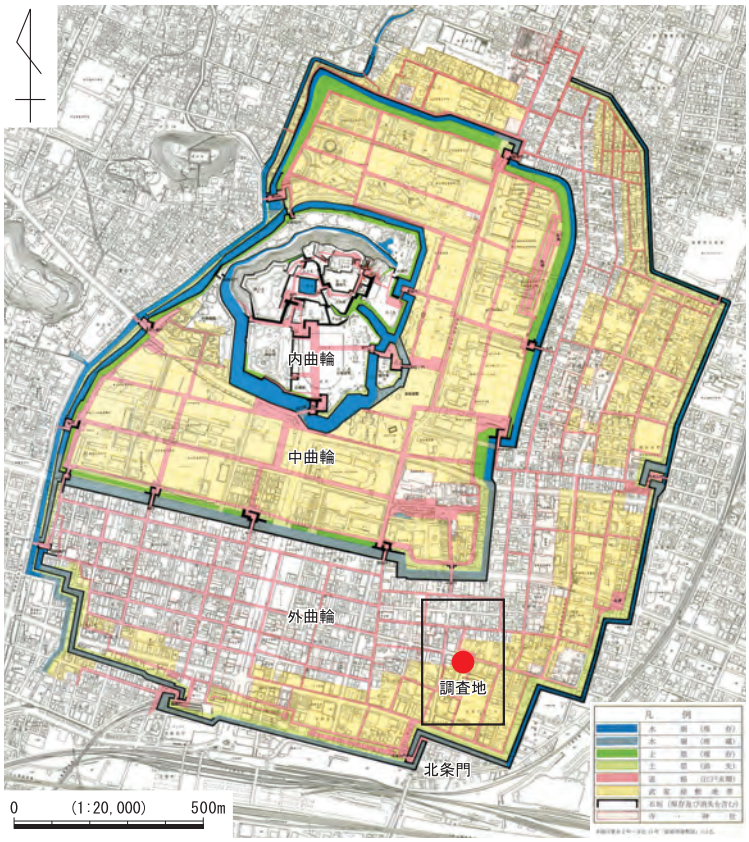
()内は復元値。単位は㎝。

番号	遺構	種別	器種	口径(長さ)	器高	最大径	底径(幅)	色調	残存	備考
1	SD06	土師器	皿	(16.8)	残2.4			2.5Y8/2灰白	口縁1/5	手づくね
2	SD06	土師器	皿		1.0		7.2	2.5Y8/2灰白	底部完形	底部回転糸切り
3	SD06	備前焼	徳利		残6.6	(5.7)	(3.9)	5YR4/4にぶい赤褐	底部1/2	肩部に刻印。胎土に長石が目立つ。
4	SD06	肥前系施釉陶器	碗		残3.0		(5.2)	7.5Y7/2灰白(釉色)	底部完形	高台露胎
5	SD06	肥前系施釉陶器	皿		残1.6		(4.0)	5Y6/3オリーブ黄(釉色)	底部完形	高台露胎
6	SD06	瓦	丸瓦	残20.0	7.2		残10.1	N4/0灰	筒部1/2	コビキBか。表面が摩耗する。
7	SD08	肥前系施釉陶器	小壺		残3.6	(8.2)	4.1	2.5Y8/6黄(釉色)	底部完形	外面底部施釉
8	SD08	備前焼	擂鉢	(30.2)	11.2	(32.2)	(13.4)	10R5/4赤褐	底部完形	11条1単位の斜め放射状擂目
9	SD09	土師器	皿	(10.0)	2.2		(8.2)	2.5Y8/2灰白	1/2	手づくね。厚手。灯明皿。
10	SD09	土師器	皿	(9.9)	2.6		(7.0)	5YR6/6橙	底部完形	底部ヘラ切り。灯明皿。
11	SD09	肥前系施釉陶器	皿		残1.7		(4.8)	2.5Y6/1黄灰(釉色)	底部1/3	内面鉄絵。高台露胎。
12	SD09	肥前系施釉陶器	向付		残3.5			5Y6/1灰(釉色)	細片	鉄絵
13	SD09	肥前系施釉陶器	碗		残2.0		(3.4)	2.5GY7/1明オリーブ灰(釉色)	底部2/3	高台露胎
14	SK28	土師器	皿	(13.0)	2.3		(7.9)	10YR8/3浅黄橙	底部1/4	底部回転糸切り
15	SK28	焼締陶器	擂鉢		残7.0		(12.4)	5YR3/2暗赤褐	底部1/3	8条1単位の擂目
16	SK28	焼締陶器	擂鉢	(28.7)	残6.0	(30.8)		5YR3/2暗赤褐	口縁1/7	8条1単位の擂目
17	SK28	青花	皿		残1.2		(6.4)	10GY8/1明緑灰(釉色)	底部1/8	高台付近に砂付着
18	SK28	肥前系施釉陶器	皿	(12.4)	3.4		4.1	7.5Y7/1灰白(釉色)	口縁1/3	砂目。溝縁皿
19	SK28	肥前系施釉陶器	皿		残1.8		(6.0)	5Y6/2灰オリーブ(釉色)	底部1/4	鉄絵
20	SK28	白磁	仏飯具		残3.7		(3.7)	7.5GY7/1明緑灰 (釉色)	底部1/4	
21	SK28	土師器	皿	9.5	2.3		6.4	2.5Y4/1黄灰	底部完形	底部糸切り。灯明皿。
22	SK28	土師器	炮烙	(25.8)	残7.0			7.5YR7/6橙	口縁1/4	体部下半に平行タタキ
23	SK28	土師器	羽釜	(14.0)	残9.1	(26.0)		10YR8/3浅黄橙	口縁1/4	鍔周辺に煤付着
24	SK28	土師器	羽釜	18.7	残15.4	25.6		7.5Y8/4浅黄橙	口縁完形	鍔より下に煤付着。双耳。
25	SK28	肥前系施釉陶器	碗		残2.5		(3.5)	7.5Y7/1灰白(釉色)	底部2/3	底部糸切り
26	SK28	肥前系施釉陶器	鉢		残6.8		4.8	10YR7/3にぶい黄橙	底部完形	畳付を除く全釉。高台付近に砂付着。
27	SK28	肥前系施釉陶器	皿	(13.4)	3.5		(4.8)	2.5YR4/2灰赤	底部7/8	鉄絵。輪花皿。
28	SK28	焼締陶器	鉢	(14.6)	残3.1			7.5YR4/3にぶい赤褐	口縁1/8	丹波焼か
29	SK28	焼締陶器	壺		残16.5		(8.9)	2.5YR4/3にぶい赤褐	底部2/5	底部・肩部に櫛描き。丹波焼か。
30	SK28	瓦	丸瓦	残15.0	5.8		13.2	5Y8/1灰白	玉縁完形	凹面に顕著な差縫い痕。表面が摩耗。
31	SK16	施釉陶器	皿	11.8	3.7		4.6	5Y6/3オリーブ黄(釉色)	底部完形	部にかけて鑿状の工具で放射状に削る。外面腰部以下無釉。
32	SK16	染付磁器	碗		残2.3		4.2	2.5GY8/1灰白(釉色)	底部完形	高台内に角枠渦福
33	SK17-2・SK23	土師器	皿	8.2	1.7		6.3	10TR7/3にぶい黄橙色	底部完形	底部糸切り
34	SK17-2・SK23	土師器	炮烙	28.4	7.7	30.7		5YR6/6橙	口縁完形	口縁下の4箇所の穿孔のうち1箇所貫通
35	SK17-2・SK23	肥前系染付磁器	碗	(10.6)	5.6		(4.2)	N8/0灰白(釉色)	底部1/2	
36	SK17-2・SK23	肥前系染付磁器	皿	11.2	2.5		7.6	5GY8/1灰白(釉色)	底部2/3	
37	SK33	土師器	皿	7.2	残1.6		5.6	10YR8/3浅黄橙	完形	底部回転糸切り
38	SK33	土師器	炮烙	(28.1)	残7.2			10YR6/4にぶい黄橙	口縁1/4	
39	SK33	関西系焼締陶器	擂鉢		残1.2			5YR6/4にぶい橙	底部片	見込みに「＊」字状の擂目
40	SK33	肥前系施釉陶器	碗	9.8	6.9		4.7	2.5Y8/3淡黄(釉色)	口径7/8	京焼風陶器。畳付を除き全釉。呉器手。
41	SK33	肥前系施釉陶器	碗	(13.1)	5.0		5.3	2.5Y7/4浅黄(釉色)	底部完形	京焼風陶器。高台露胎。高台内に銘。
42	SK33	施釉陶器	皿	(20.1)	4.0		(7.7)	10YR5/4にぶい黄褐(釉色)	口縁1/6	見込みに砂目。畳付を除き全釉。
43	SK33	肥前系染付磁器	碗	(9.2)	5.2		(4.1)	2.5GY8/1灰白(釉色)	底部1/2	
44	SK33	肥前系染付磁器	皿	(15.6)	4.0		(6.0)	7.5GY8/1明緑灰(釉色)	口縁1/5	蛇ノ目釉剥ぎ
45	SK33	肥前系染付磁器	皿	(13.2)	3.6		4.6	N8/0灰白(釉色)	底部完形	
46	SK33	磁器	小杯	(6.9)	残4.0			5YR4/3にぶい赤褐(釉色)	口縁1/5	外面に鉄釉
47	SK33	白磁	皿	9.8	2.9		(3.8)	N8/0灰白(釉色)	口縁3/5	蛇ノ目釉剥ぎ。高台付近無釉。
48	SK22	土師器	皿	7.0	1.7		4.6	7.5YR8/4浅黄橙	口縁3/4	底部回転糸切り
49	SK22	土師器	皿		残1.7		6.3	7.5YR7/6橙	底部完形	底部回転糸切り
50	SK22	土師器	塙	(32.3)	11.4		(21.5)	10YR7/4にぶい黄橙	1/3	外面に煤付着
51	SK22	土師器	炮烙	32.9	6.2	34.2		10YR4/3にぶい黄褐	ほぼ完形	
52	SK22	関西系焼締陶器	擂鉢		残7.5			7.5YR6/4にぶい橙	口縁1/10	縁帯内面に刻印「さ上」
53	SK22	関西系焼締陶器	擂鉢	34.1	13.7	35.4	16.9	2.5Y6/8橙	口縁3/4	
54	SK22	陶器	灯明皿	7.9	1.2			2.5YR5/4にぶい赤褐	ほぼ完形	
55	SK22	施釉陶器	碗	(9.3)	5.7		(3.2)	5Y8/2灰白(釉色)	口縁2/5	京・信楽焼系。高台付近無釉。
56	SK22	施釉陶器	碗	(9.4)	5.6		(3.2)	5Y7/1灰白(釉色)	底部1/3	京・信楽焼系。高台付近無釉。
57	SK22	施釉陶器	碗	(10.4)	4.8		(4.6)	5Y6/3オリーブ黄(釉色)	口縁1/4	京・信楽焼系。唐草文。高台付近無釉。
58	SK22	備前焼	徳利		残9.5		4.1	2.5YR5/1赤灰	底部完形	肩部にカキメ。体部に3箇所の凹み。うち1箇所に布袋尊を陽刻。
59	SK22	染付磁器	小碗	(5.2)	2.7		(2.2)	7.5GY8/1明緑灰(釉色)	底部1/2	草文
60	SK22	染付磁器	碗	(9.8)	5.6		3.6	2.5GY8/1灰白(釉色)	底部2/3	高台内に「富貴長春」
61	SK22	染付磁器	碗	(9.3)	5.1		(3.7)	10GY8/1明緑灰(釉色)	口縁1/2	
62	SK22	染付磁器	碗	(10.7)	5.0		(3.7)	5GY8/1灰白(釉色)	口縁1/2	半球碗。畳付を除き全釉。菊花文。
63	SK22	染付磁器	碗	(10.6)	6.0		(4.8)	5Y7/1灰白(釉色)	口縁1/3	陶胎
64	SK22	染付磁器	碗	10.4	7.1		4.5	2.5GY6/1オリーブ灰(釉色)	口縁1/2	陶胎。畳付に砂付着。
65	SK22	染付磁器	碗	10.7	6.8		4.5	5GY8/1灰白(釉色)	口縁7/8	
66	SK22	染付磁器	猪口	(7.6)	5.8		(4.8)	5GY8/1灰白(釉色)	底部1/3	外面に松竹梅文
67	SK22	染付磁器	皿	(14.6)	5.0		(9.1)	5BG7/1明青灰(釉色)	底部2/3	蛇ノ目凹形高台。見込みに松竹梅文。
68	SK22	染付磁器	蓋	10.3	2.7		4.0	2.5GY8/1灰白(釉色)	3/4	
69	SK22	染付磁器	水滴	10.9	3.4		6.7	5Y8/1灰白(釉色)	1/2	全釉。底面に歪み。
70	SK22	瓦	軒丸瓦		残7.3			N4/0灰	瓦当1/4	丸瓦との接合部に縦方向の刻み目
71	SK22	金属製品	銭貨	2.5					完形	寛永通宝。裏面に「文」。
72	SK17-1	土師器	皿	7.5	1.7		5.2	10YR7/4にぶい黄橙	底部完形	底部糸切り
73	SK17-1	土師器	炮烙	(29.4)	残5.9	(31.3)		7.5YR6/4にぶい橙	底部1/6	
74	SK17-1	関西系焼締陶器	擂鉢		残4.5			5YR5/3にぶい赤褐	口縁片	片口は形骸化
75	SK17-1	施釉陶器	碗	(8.5)	残3.8		4.3	2.5Y7/4浅黄(釉色)	底部完形	京・信楽焼系
76	SK17-1	施釉陶器	鉢	(15.5)	5.9		(5.6)	7.5YR4/2灰褐(釉色)	底部1/2	蛇ノ目釉剥ぎ。高台内面を深く削る。
77	SK17-1	染付磁器	碗	(9.6)	残4.8			2.5GY8/1灰白(釉色)	口縁1/3	
78	SK17-1	青磁	火入	(14.7)	残4.8		(10.2)	7.5GY7/1明緑灰(釉色)	底部1/5	蛇ノ目凹形高台。内面無釉。
79	SK17-1	瓦	丸瓦	23.8	5.6		12.0	5Y4/1灰	ほぼ完形	コビキB
80	SK42	関西系焼締陶器	擂鉢		残4.6			5YR5/4にぶい赤褐	口縁1/8	片口は形骸化
81	SK42	瓦	桟瓦	16.3	3.2		残13.2	N6/0灰	不明	コーナー部に隅切り
82	SK29	染付磁器	蓋	(9.0)	2.4		5.0	2.5GY8/1灰白(釉色)	口径1/10	外面に暦文
83	SK29	染付磁器	碗	10.4	5.6		4.4	N8/0灰白(釉色)	口縁7/8	見込みに岩波文
84	SK30	土師器	炮烙	32.5	6.4	34.0		7.5YR7/6橙	口縁9/10	
85	SK30	染付磁器	小碗		残2.8		2.4	N9/0白(釉色)	底部完形	「おん」・「さ（きトモ）」の朱書き
86	SK30	染付磁器	碗	9.3	5.2		4.2	10Y8/1灰白(釉色)	口縁7/8	見込みに昆虫文か
87	SK30	土製品	竈か	残9.5	4.8		8.6	10YR6/4にぶい黄橙		内面に8条1単位の刻み目
88	SE01	瓦	井戸側瓦	26.3	5.6		25.1	N2/0黒	完形	「>」字状の切り込み内に漆喰が付着
89	SE05	丹波焼	甕	32.5	30.8	32.5	16.2	5YR3/4暗赤褐(釉色)	底部完形	底部穿孔
90	SD14	弥生土器	高杯	(18.0)	11.8			7.5YR6/6橙	杯部1/4	有稜高杯。内外面ミガキ。

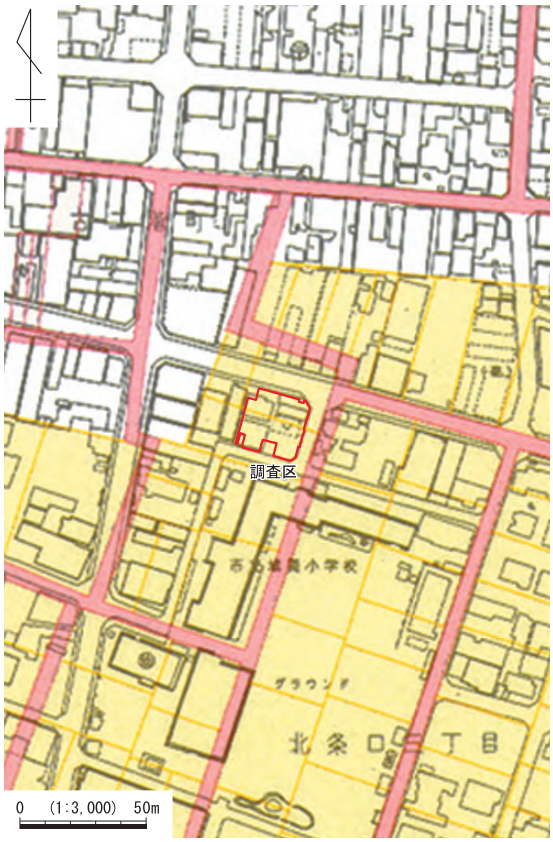
表1　出土遺物観察表



1. 周辺の遺跡

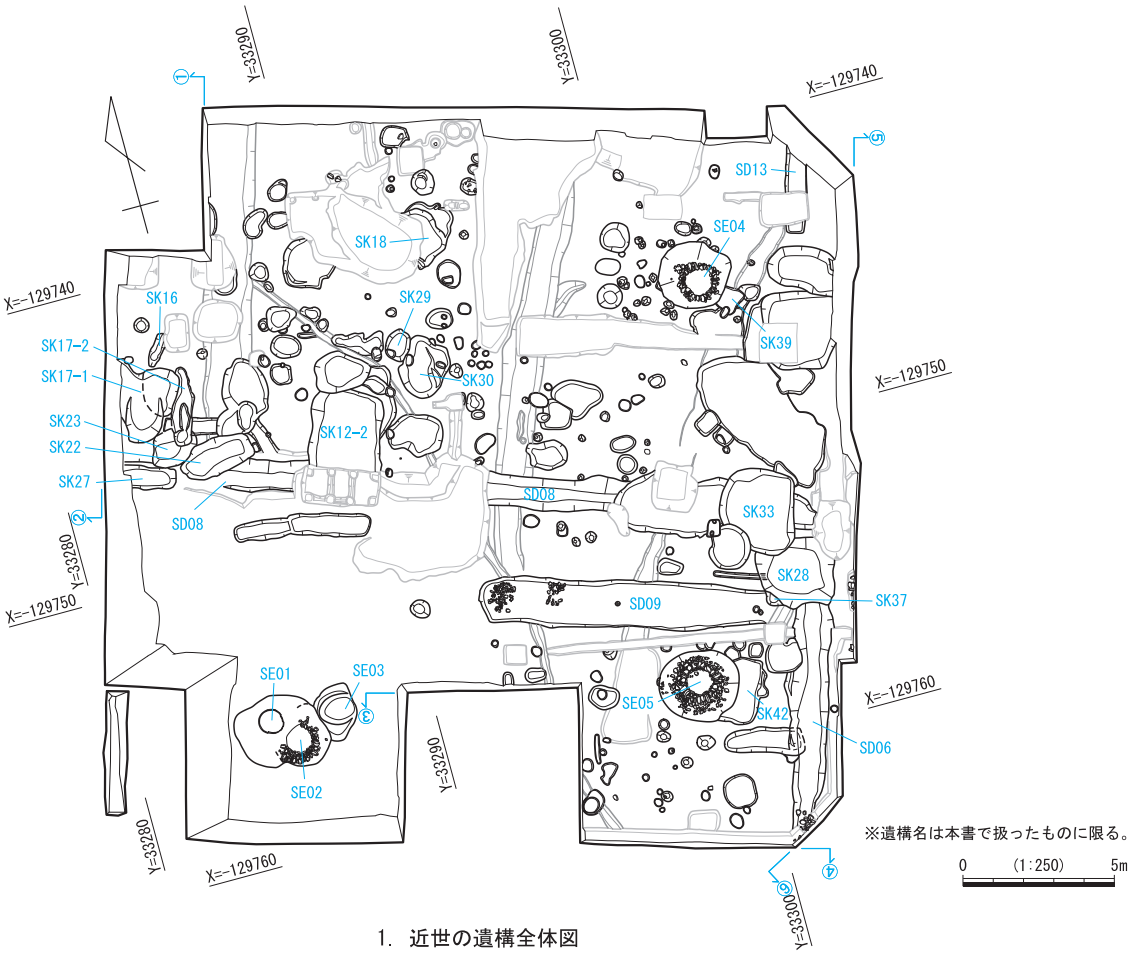


2. 調査位置図

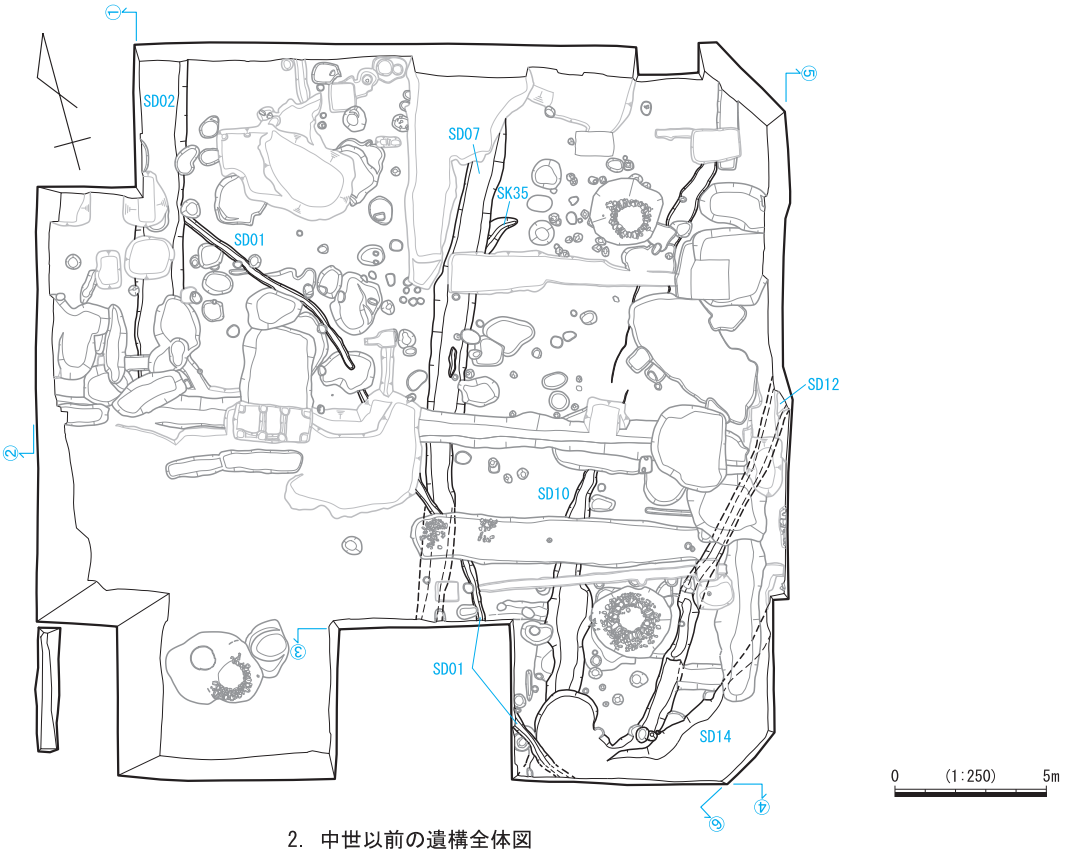


3. 調査区配置図

図版 2



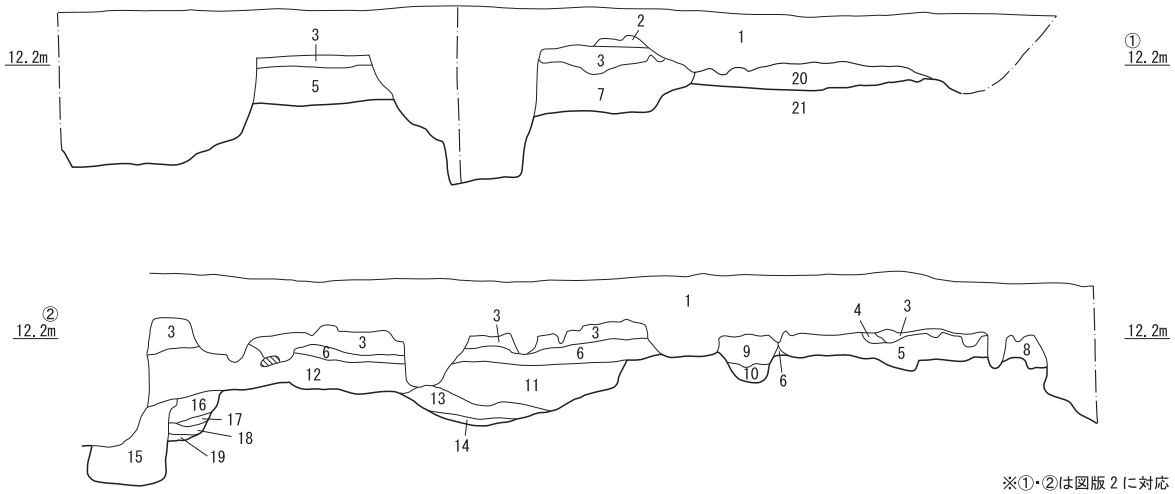
1. 近世の遺構全体図



2. 中世以前の遺構全体図

調査区西壁①ー②

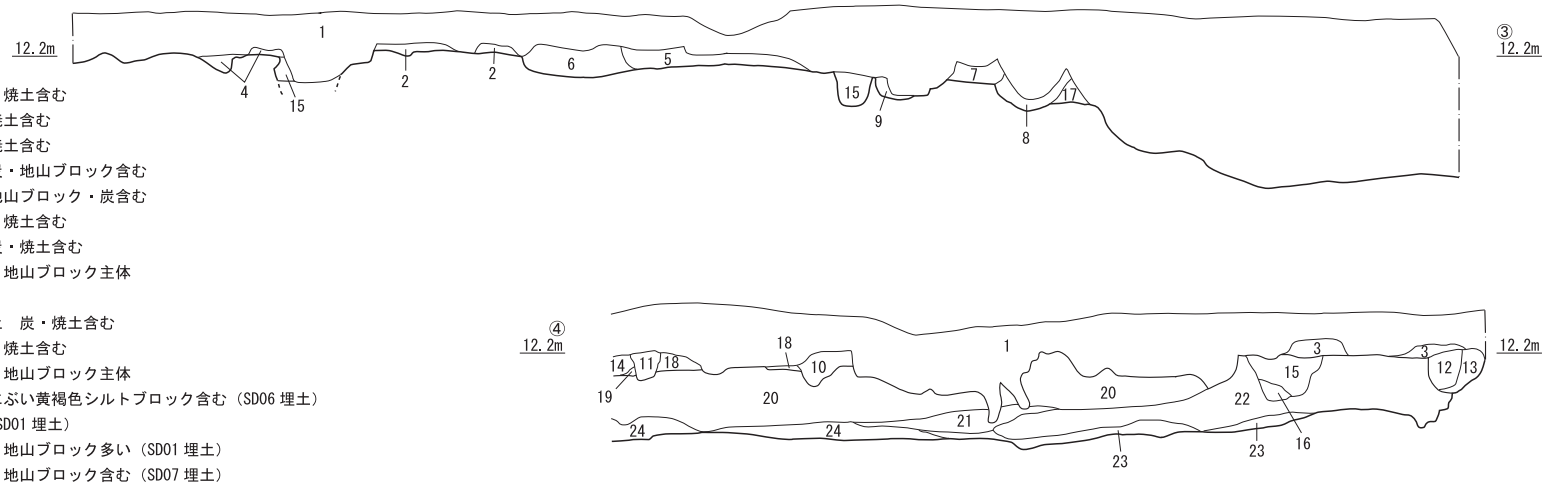
1. 盛土・攪乱土
2. 三和土
3. 10YR4/1 褐灰色極細砂～細砂　近現代の磁器含む
4. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂
5. 10YR6/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　炭・土師器極細片含む
6. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　炭・焼土含む
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　炭・地山ブロック混じる
8. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　径 3 cm大の小礫含む
9. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック含む
10. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック混じる
11. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　炭多く含む。地山ブロック少ない
12. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　炭・拳大の地山ブロック含む
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂～細砂　比較的均質。炭少量含む（SK17-1 埋土）
14. 10YR5/4 黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック含む（SK17-1 埋土）
15. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　炭・焼土・地山ブロック含む（SK27 埋土）
16. 10YR6/2 灰黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック含む（SD08 埋土）
17. 10YR6/2 灰黄褐色極細砂～細砂　黄灰色土・地山ブロック含む（SD08 埋土）
18. 10YR6/3 にぶい黄橙色極細砂～細砂　黄灰色土・地山ブロック含む（SD08 埋土）
19. 10YR6/3 にぶい黄橙色極細砂～細砂　地山ブロック多く含む（SD08 埋土）
20. 7.5YR5/2 灰褐色シルト質細砂　地山ブロック微混（SD02 埋土）
21. 10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土　地山



※①・②は図版 2 に対応

調査区南壁③ー④

1. 盛土・攪乱土
2. 10YR6/2 灰黄褐色極細砂～細砂　焼土含む
3. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂～細砂　焼土含む
4. 10YR5/3 黄褐色極細砂～細砂　焼土含む
5. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂～細砂　炭・地山ブロック含む
6. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック・炭含む
7. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　焼土含む
8. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　炭・焼土含む
9. 2.5Y7/6 明黄褐色シルト質粘土　地山ブロック主体
10. 10YR5/3 黄褐色極細砂～細砂
11. 5Y6/2 灰オリーブ色シルト質粘土　炭・焼土含む
12. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質粘土　焼土含む
13. 2.5Y7/6 明黄褐色シルト質粘土　地山ブロック主体
14. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂～細砂　にぶい黄褐色シルトブロック含む（SD06 埋土）
15. 7.5YR4/2 灰褐色シルト質粘土（SD01 埋土）
16. 10YR6/6 明黄褐色シルト質細砂　地山ブロック多い（SD01 埋土）
17. 10YR6/2 灰黄褐色シルト質細砂　地山ブロック含む（SD07 埋土）
18. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト質細砂
19. 10YR6/3 にぶい黄褐色細砂～中砂
20. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細砂　マンガン集積（SD14 埋土）
21. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質細砂　マンガン集積（SD14 埋土）
22. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト　マンガン集積（SD14 埋土）
23. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂～中砂（SD14 埋土）
24. 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂～粗砂（SD14 埋土）

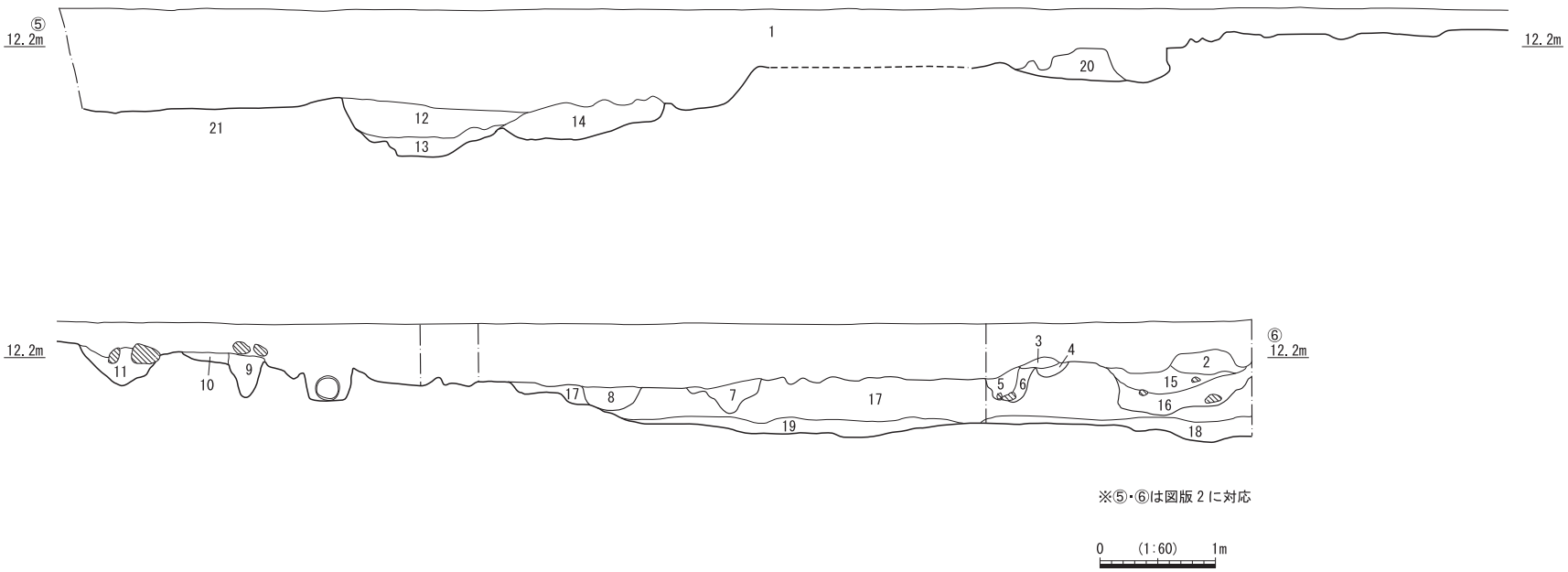


※③・④は図版 2 に対応

調査区西・南壁断面図

0　(1:60)　1m

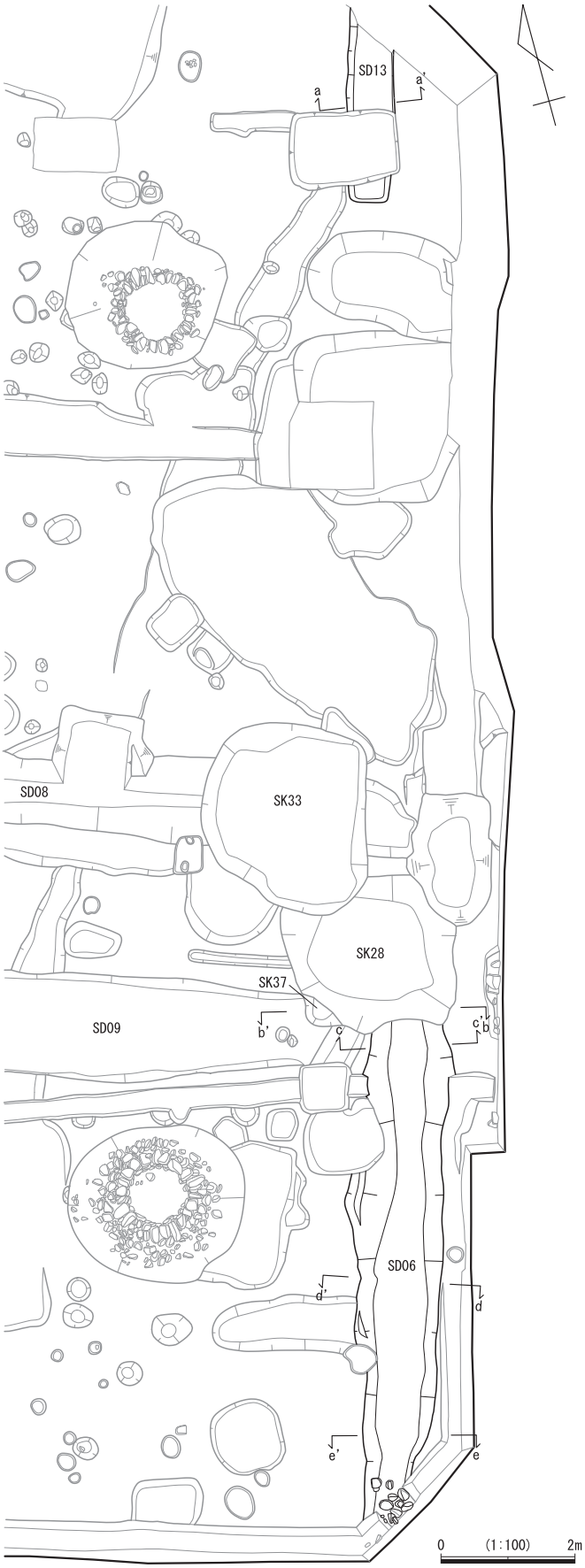
図版 3



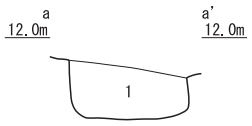
調査区東壁⑤ー⑥

1. 盛土・撹乱土
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂～細砂　にぶい黄褐色シルトブロック含む
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂～細砂
4. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂～細砂　炭含む
5. 10YR5/3 黄褐色極細砂～細砂　炭含む
6. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂～細砂　炭含む
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　焼土含む
8. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂
10. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂　均質
11. 2.5Y5/6 黄褐色極細砂～細砂　均質
12. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂～細砂　地山ブロック含む（SK47 埋土）
13. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂～細砂　地山ブロック多く含む（SK47 埋土）
14. 2.5Y7/4 にぶい黄色極細砂～細砂（SK43 埋土）
15. 2.5Y7/6 明黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック主体（SD06 埋土）
16. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂～細砂　炭・にぶい黄褐色シルトブロック含む（SD06 埋土）
17. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細砂　マンガン集積（SD14 埋土）
18. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂～中砂（SD14 埋土）
19. 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂～粗砂（SD14 埋土）
20. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土（SD12 埋土）
21. 10YR7/8 黄橙色シルト質粘土　地山

調査区東壁断面図



1. SD06・SD13 平面図

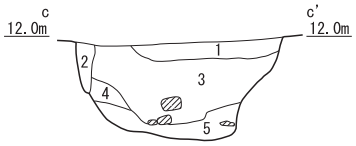


1. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂～細砂
地山ブロック・炭・焼土混じる

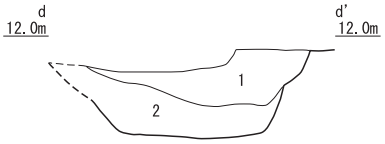
2. SD13 断面図

1. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂
拳大地山ブロック・焼土含む（SD09 埋土）
2. 2.5Y5/6 黄褐色シルト質細砂（SK37）

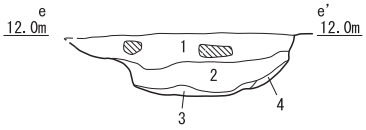
3. SK28・SK37 断面図



1. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　粗砂・炭・焼土含む
2. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　粒状の地山ブロック含む
3. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　乳児頭大円礫・炭・焼土含む
4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土　炭含む
5. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト質粘土　地山ブロック主体



1. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細砂　地山ブロック含まない

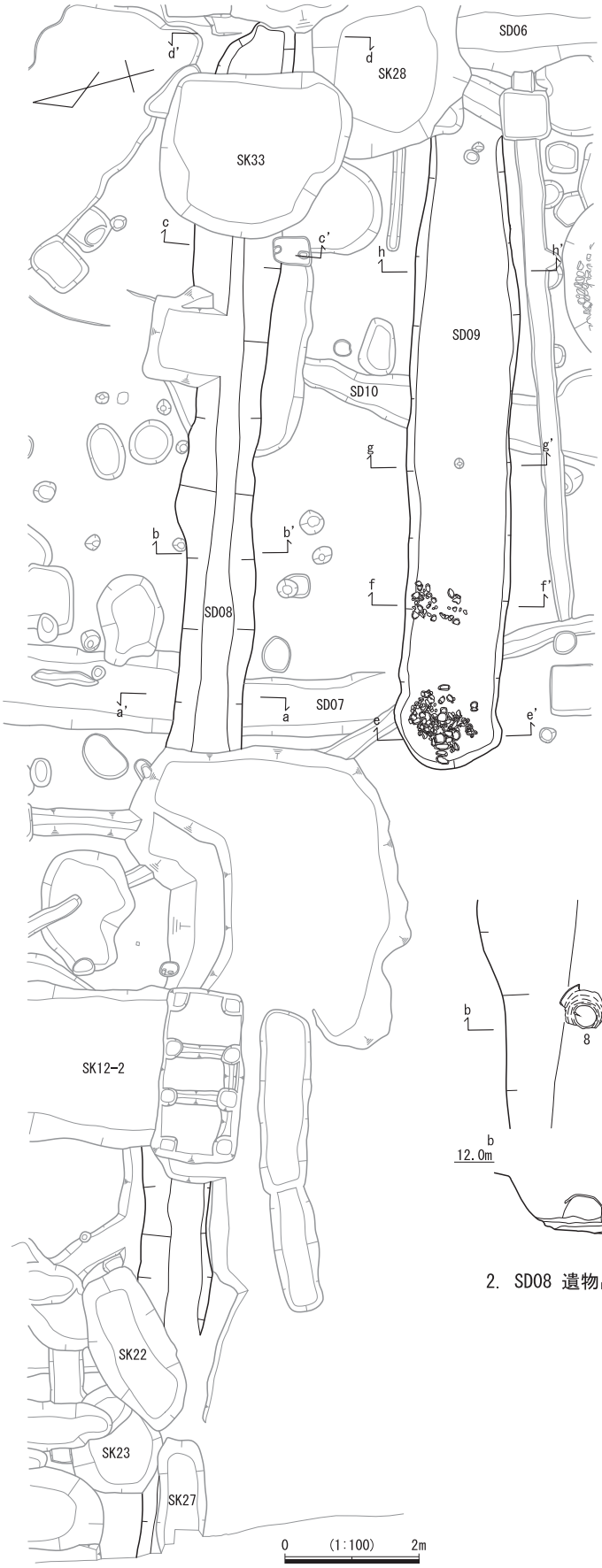


1. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂～細砂　拳大～乳児頭大円礫・地山ブロック含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細砂
3. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト質粘土　地山ブロック主体
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質粘土

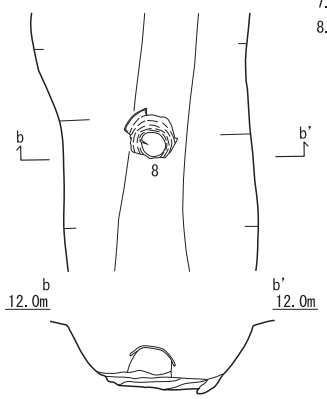
0 (1:40) 1m

4. SD06 断面図

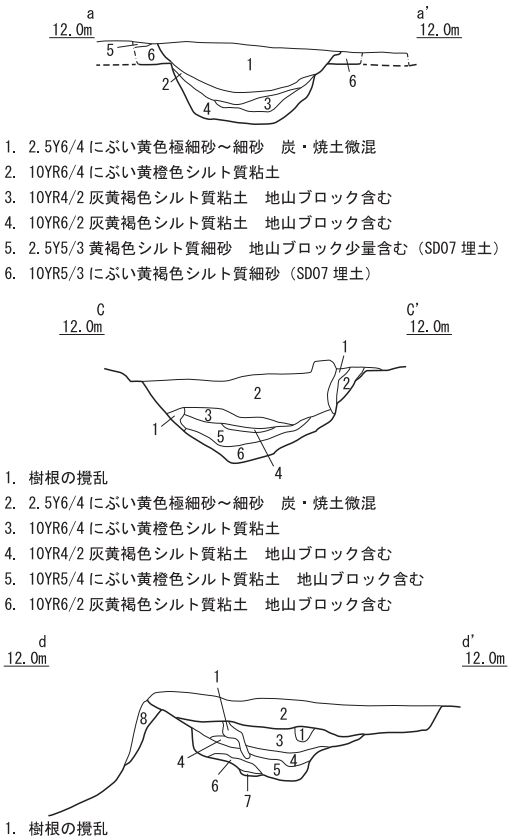
図版 6



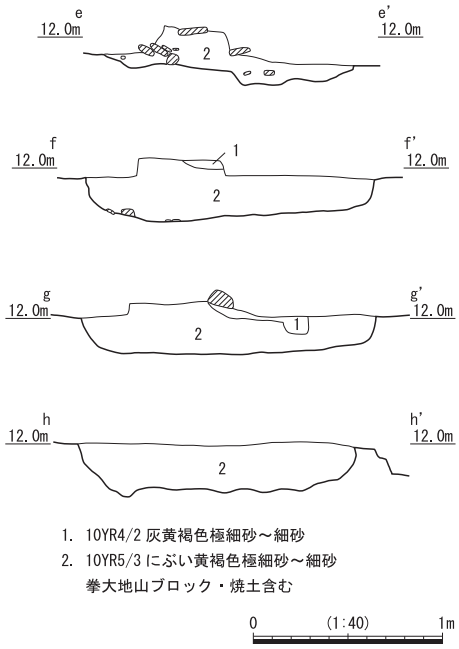
1. SD08・SD09 平面図



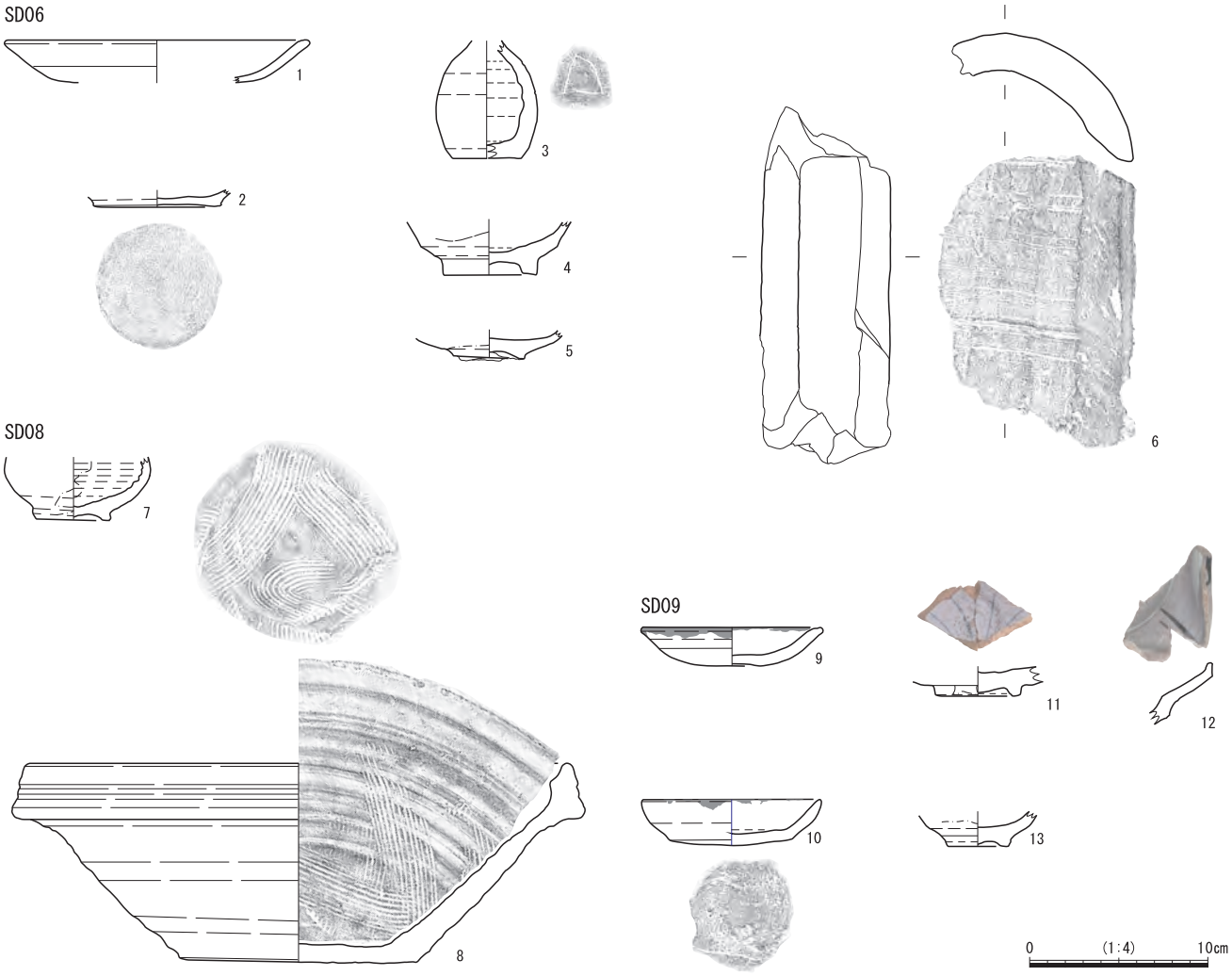
2. SD08 遺物出土状況図



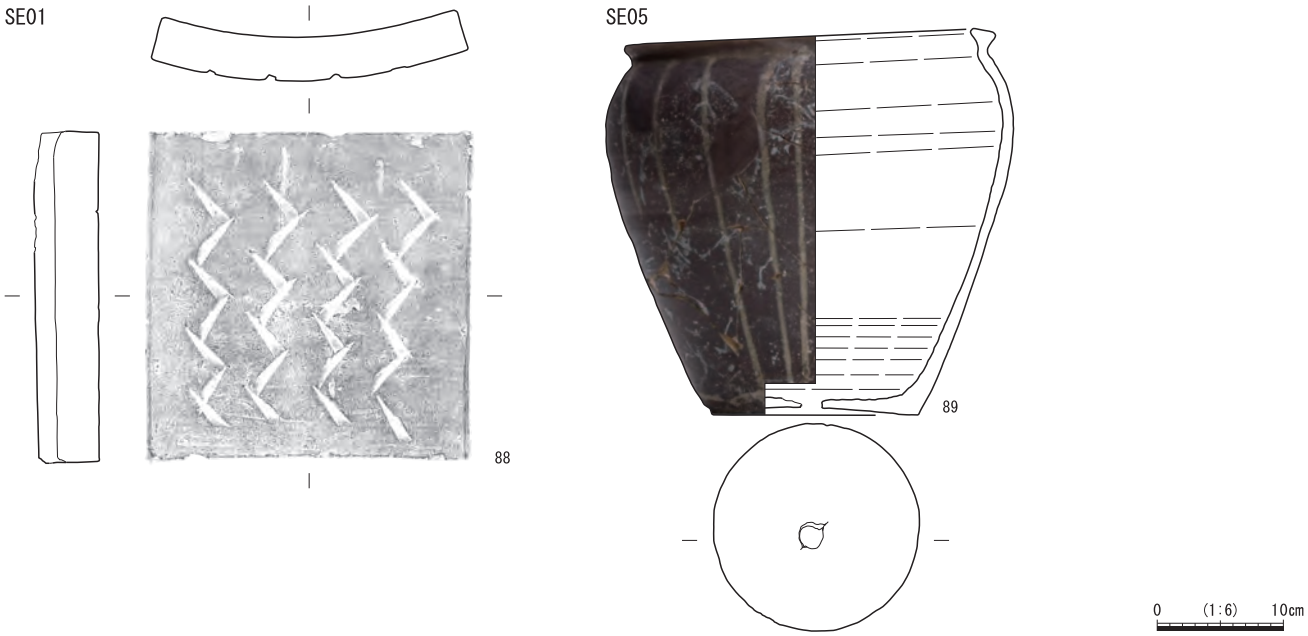
3. SD08 断面図



4. SD09 断面図

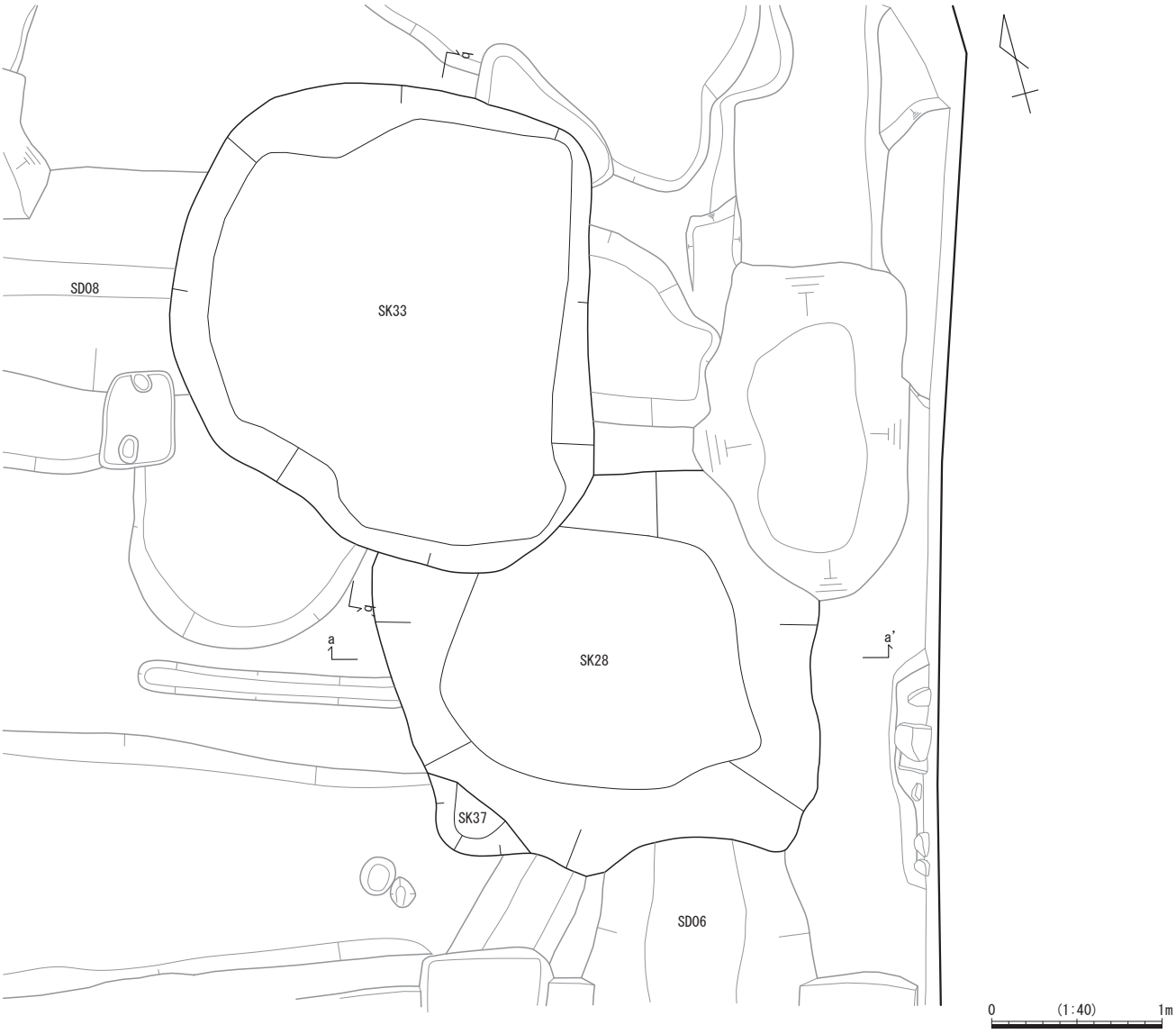


1. SD06・SD08・SD09 出土遺物



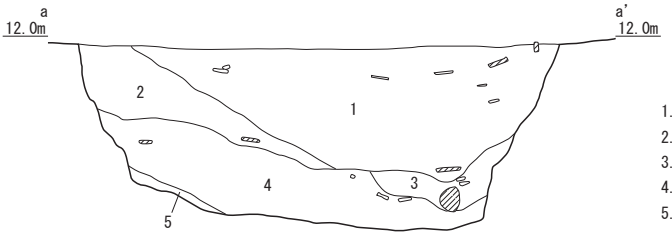
2. SE01・SE05 出土遺物

図版 8



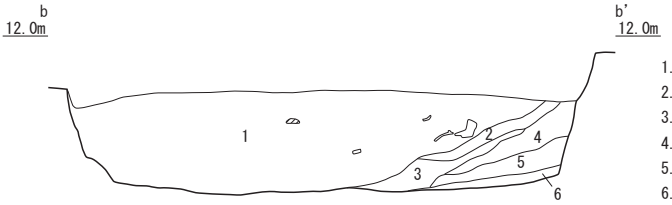
1. SK28・SK33・SK37 平面図

SK28



1. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細砂　拳大円礫・炭含む
2. 10YR5/6 黄褐色極細砂～細砂　炭・拳大円礫含む。やや締まる
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂～細砂　乳児頭大円礫含む。やや締まる
4. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質細砂　地山ブロック混じる
5. 10YR6/6 明黄褐色シルト質粘土　4 層混じる

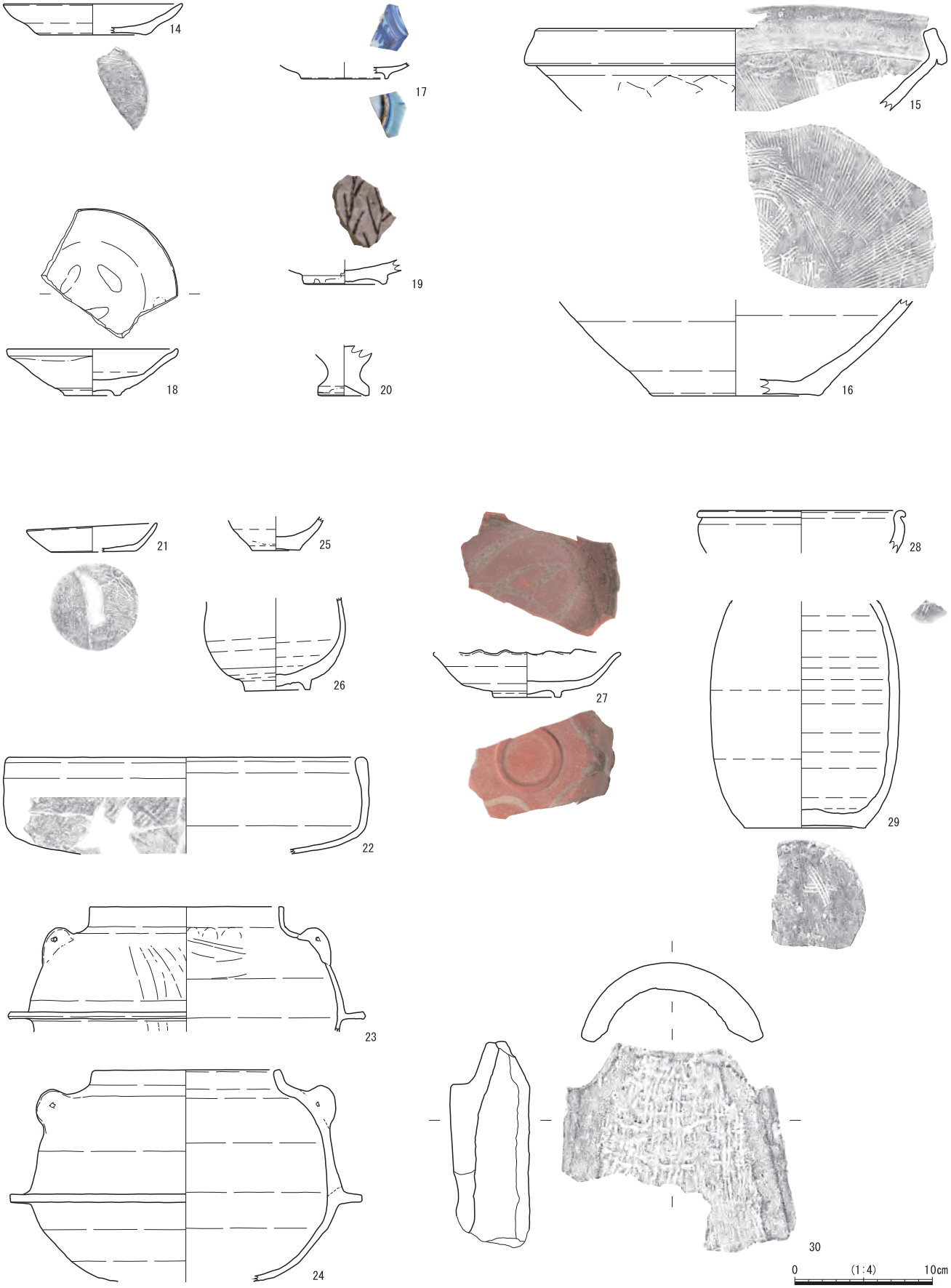
SK33



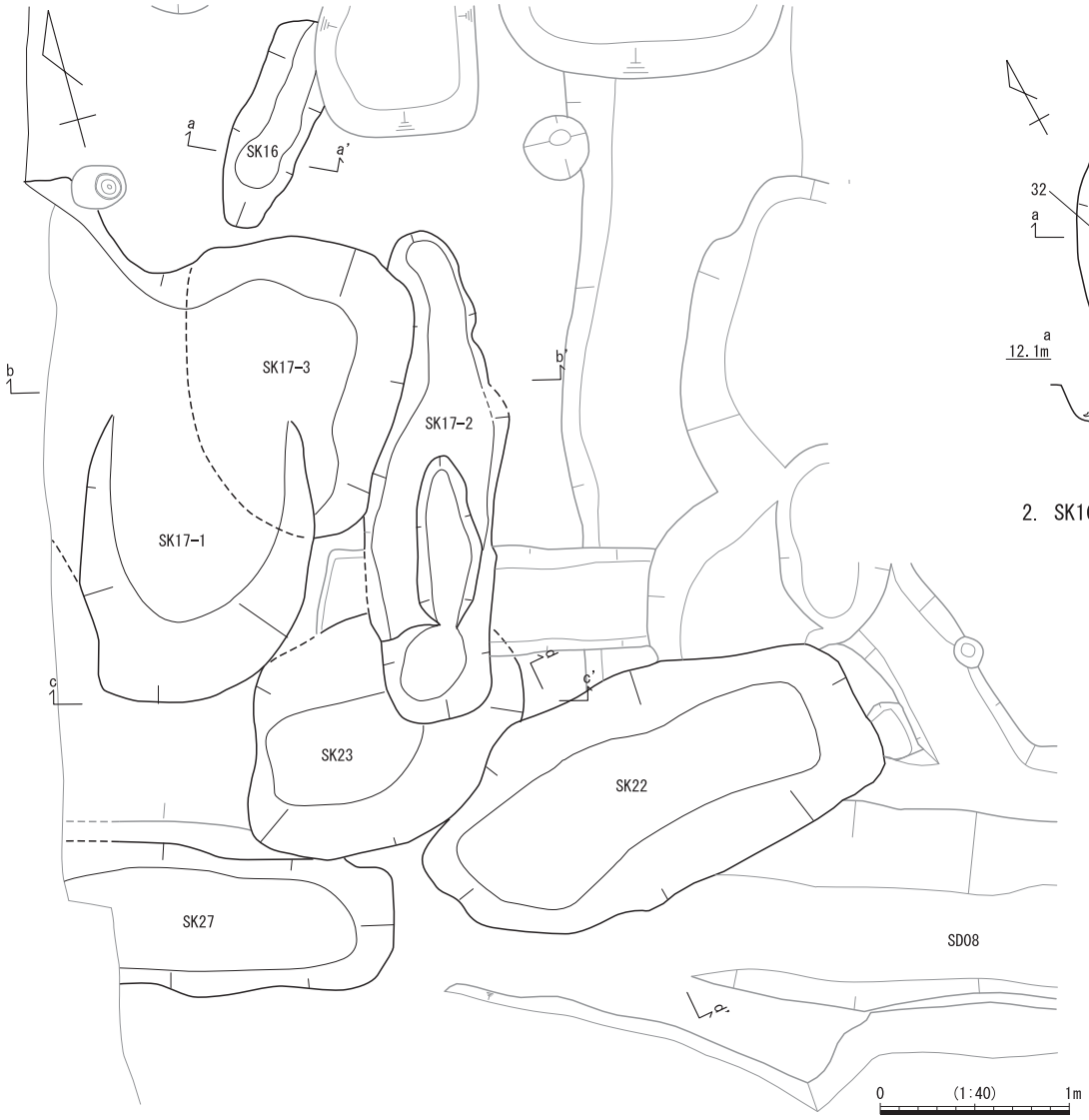
1. 10YR4/2 灰褐色極細砂～細砂
2. 10YR6/6 明黄褐色シルト質粘土　地山ブロック主体
3. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂　粗砂含む
4. 10YR6/6 明黄褐色シルト質粘土　地山ブロック主体
5. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂
6. 2.5Y7/6 明黄褐色シルト質粘土　地山ブロック主体

0　(1:40)　1m

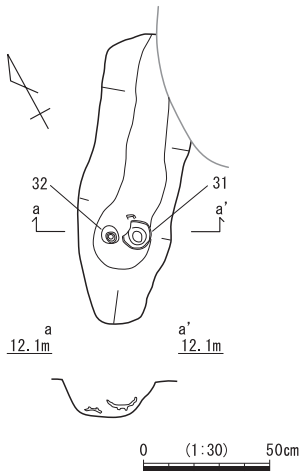
2. SK28・SK33 断面図



SK28 出土遺物

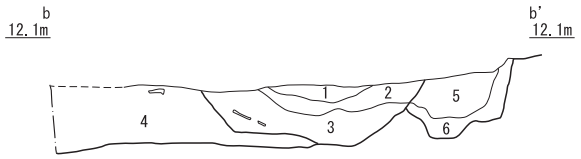


1. SK16・SK17・SK22・SK23・SK27 平面図



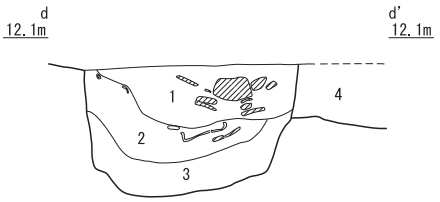
2. SK16 遺物出土状況図

SK17-1 ～ 3



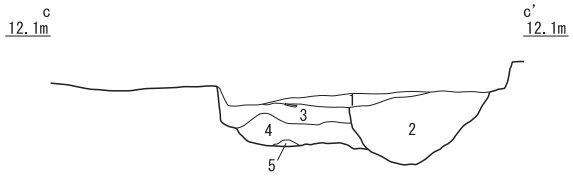
1. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂～細砂（SK17-3 埋土）
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂～細砂　炭多く含む（SK17-3 埋土）
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　径 3 cm大円礫含む（SK17-3 埋土）
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂～細砂　比較的均質。炭少量含む（SK17-1 埋土）
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　比較的均質。炭少量含む（SK17-2 埋土）
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂～細砂　地山ブロック混じる（SK17-2 埋土）

SK22



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂～細砂　人頭大円礫・瓦含む
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂～細砂　貝殻多く含む。炭・焼土含む
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂～細砂　炭含む
4. SD08 埋土

SK17-2・SK23

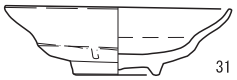


1. 10YR6/2 灰黄褐色極細砂～細砂　比較的均質。炭含む
2. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　炭・焼土含む。地山ブロック微混（SK17-2 埋土）
3. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂　炭・焼土含む（SK23 埋土）
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細砂　地山ブロック・炭含む（SK23 埋土）
5. 10YR7/6 明黄褐色シルト質粘土　炭含む（SK23 埋土）

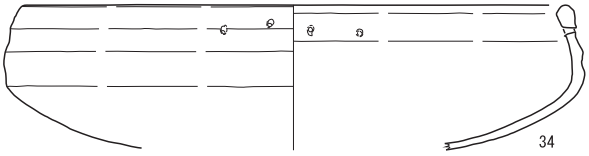
0 (1:40) 1m

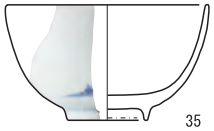
3. SK17・SK22・SK23 断面図

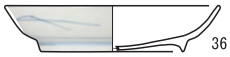
SK16



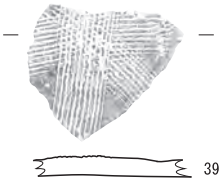
SK17-2・SK23

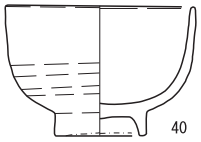


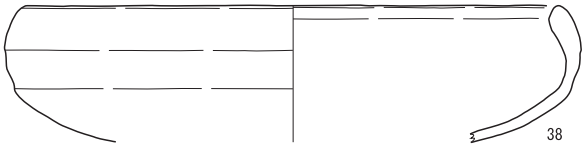


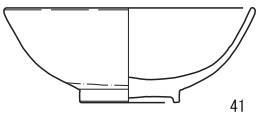


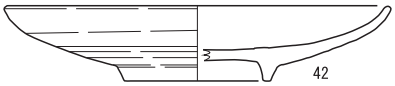
SK33







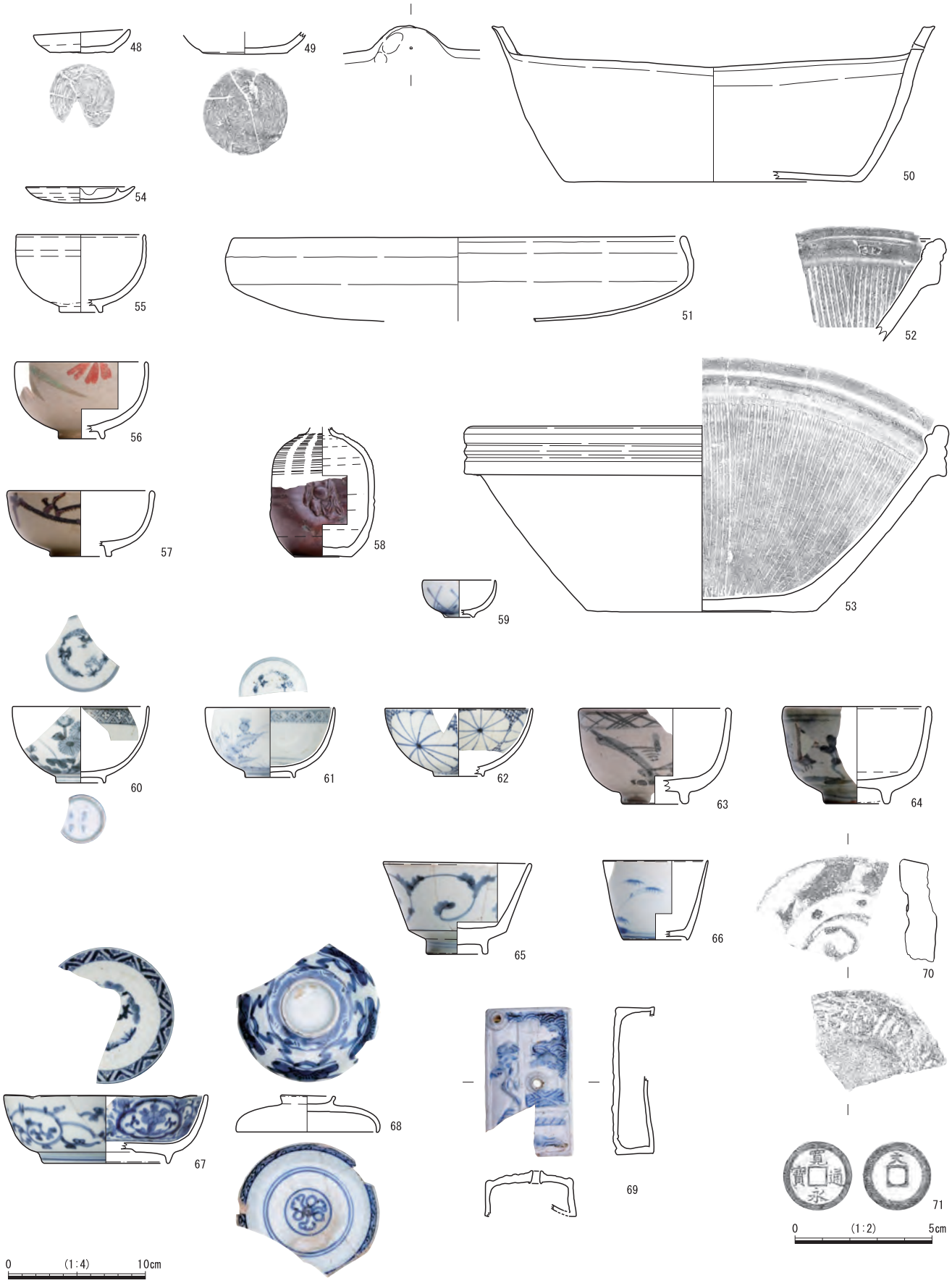




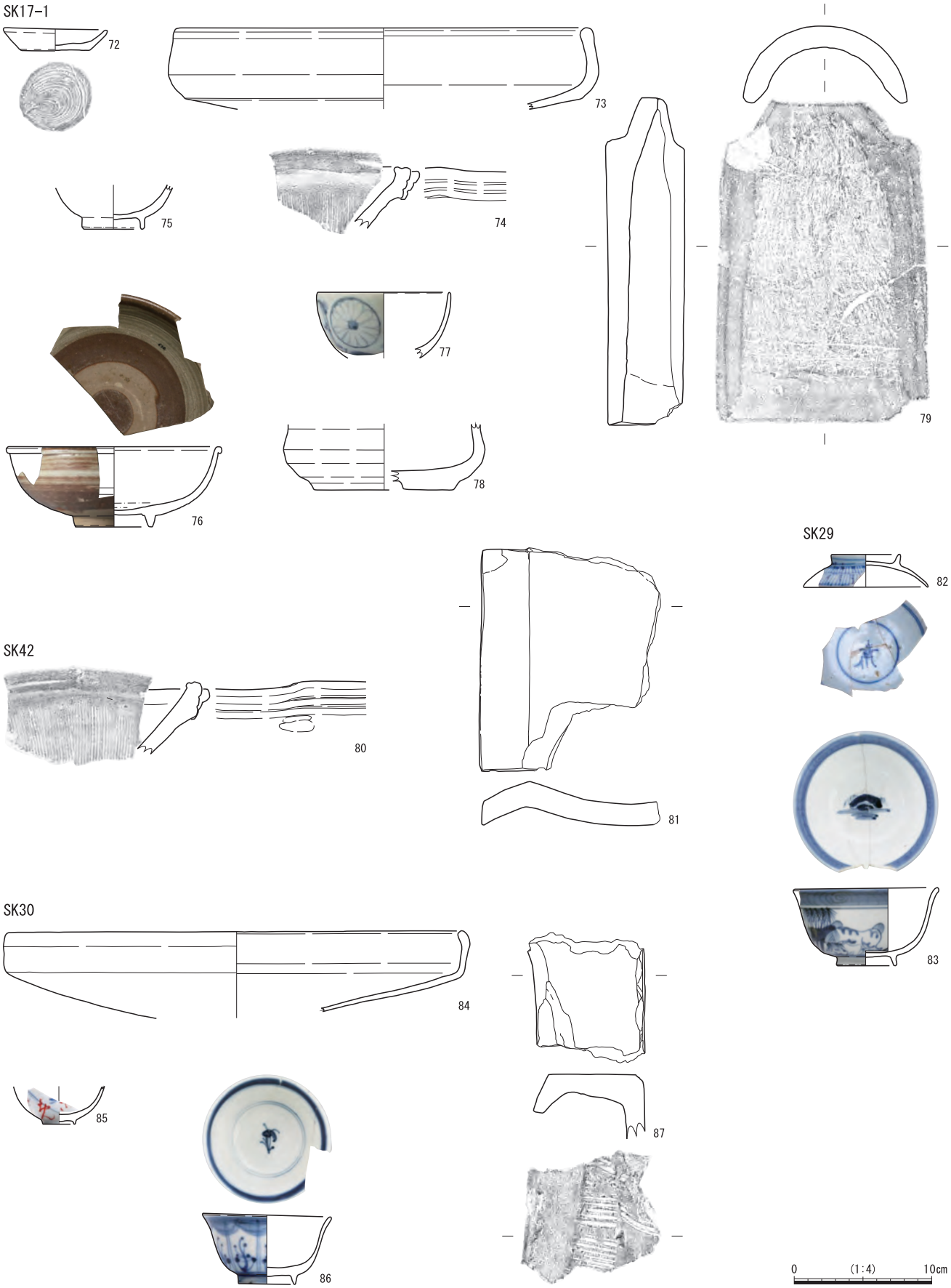
0 (1:4) 10cm

SK16・SK17-2・SK23・SK33 出土遺物

図版 12

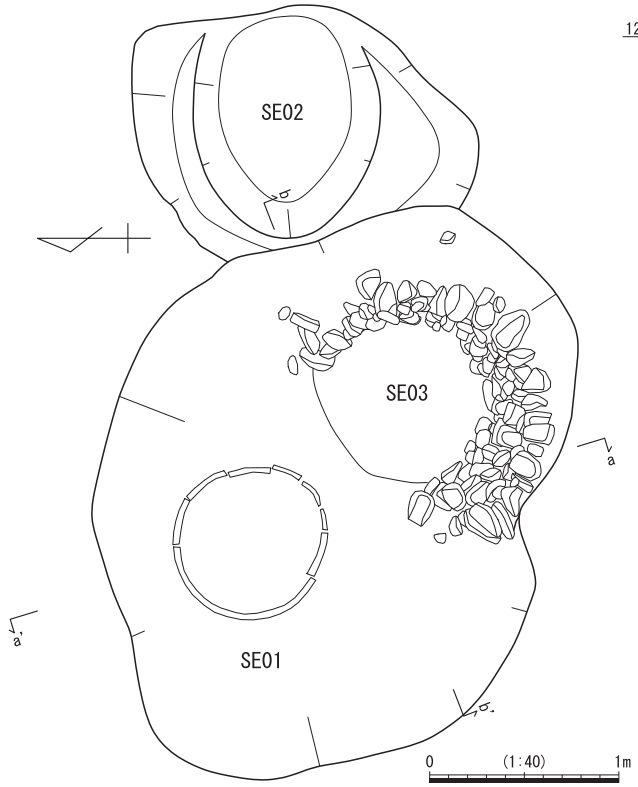


SK22 出土遺物

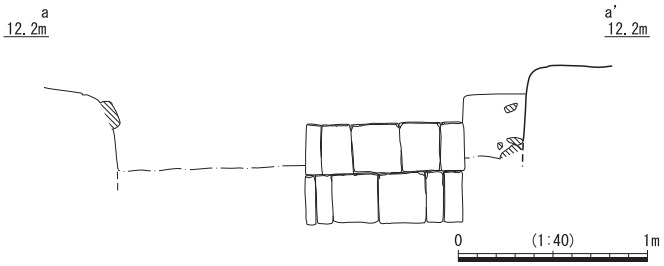


SK17-1・SK42・SK29・SK30 出土遺物

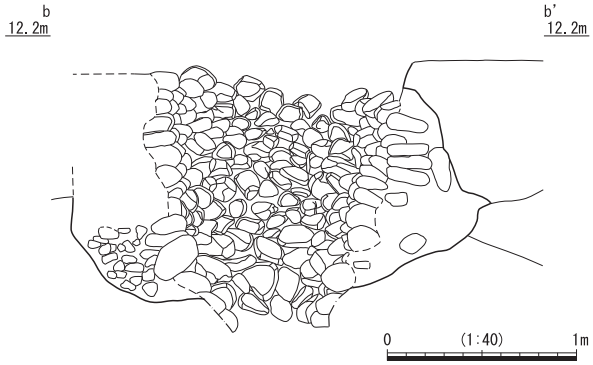
図版 14



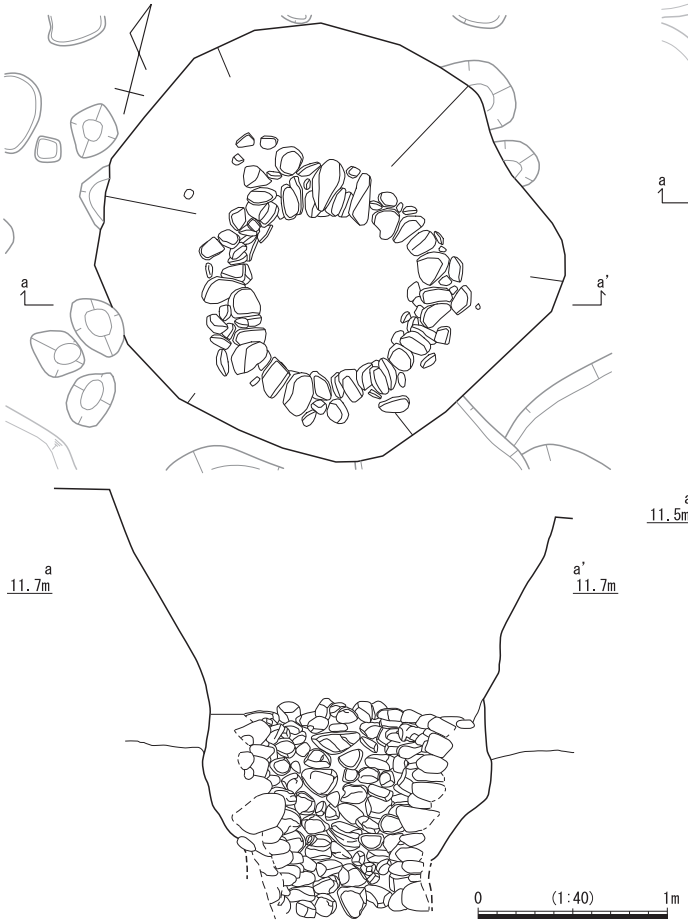
1. SE01・SE02・SE03 平面図



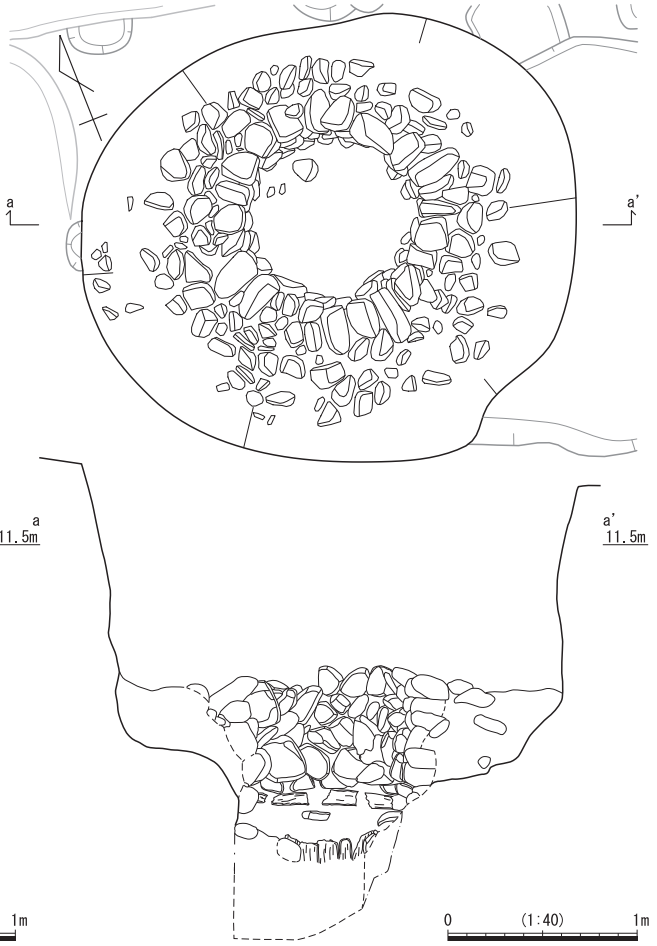
2. SE01 断面・見通し図



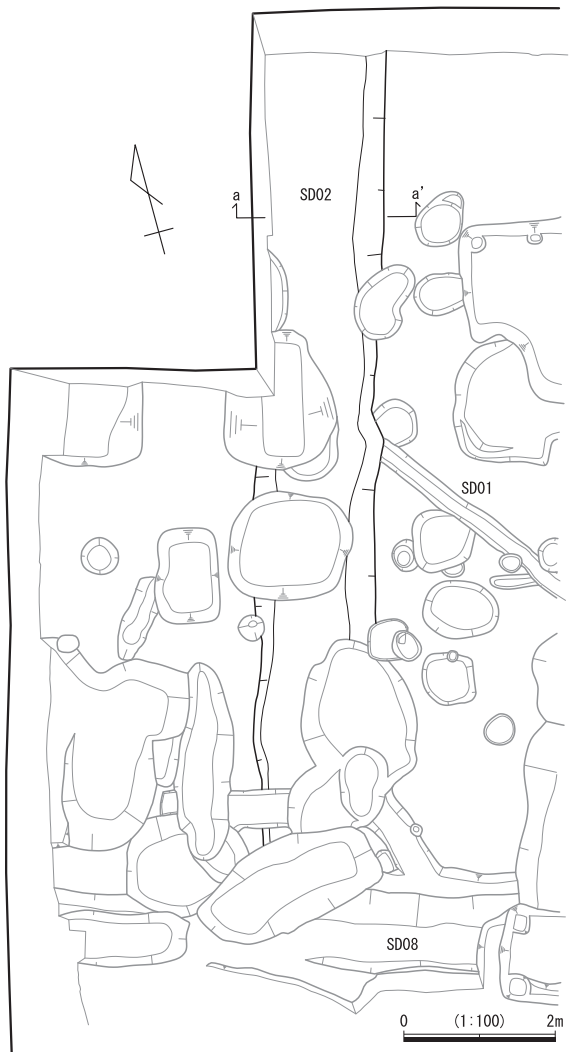
3. SE03 断面・見通し図



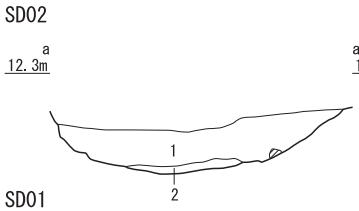
4. SE04 平面・断面・見通し図



5. SE05 平面・断面・見通し図



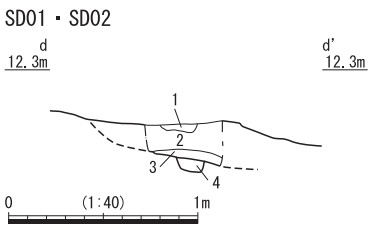
1. SD02 平面図



1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト質細砂　地山ブロック微混
2. 7.5YR5/2 灰褐色細砂～中砂　地山ブロック含む

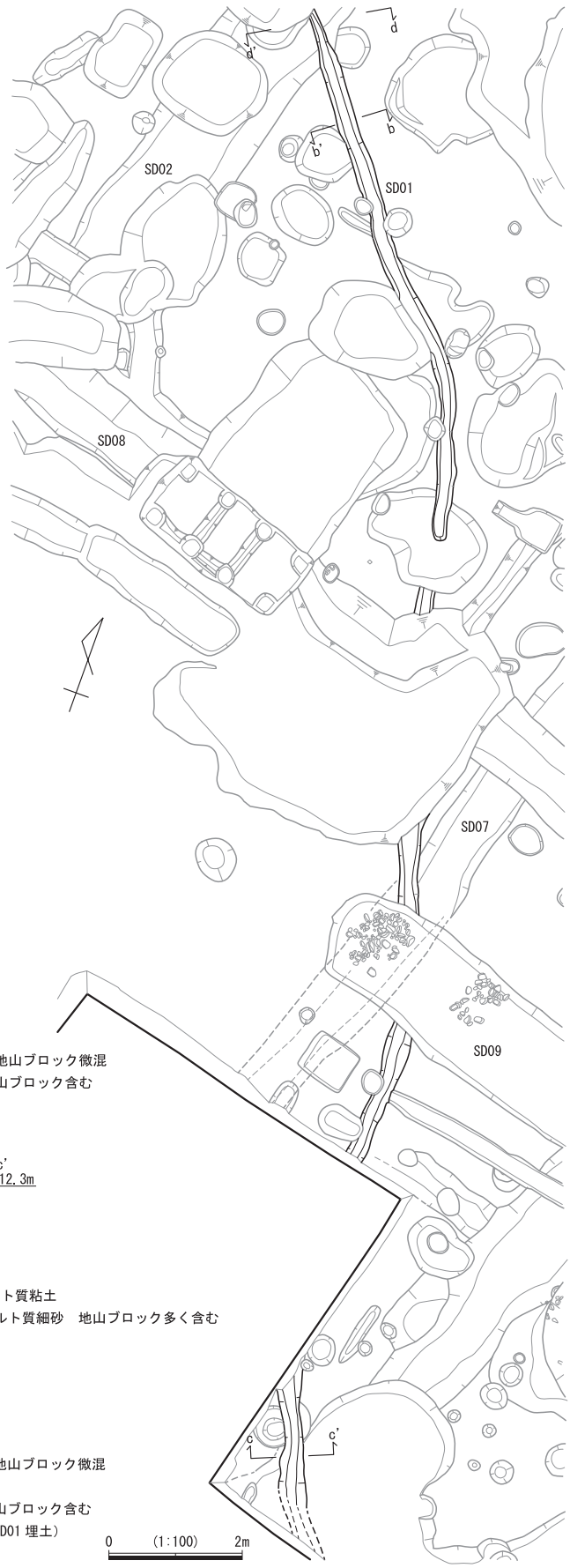
1. 7.5YR4/2 灰褐色シルト質粘土
2. 10YR6/6 明黄褐色シルト質細砂　地山ブロック多く含む
3. 7.5YR5/2 灰褐色シルト質粘土　地山ブロック少量含む

1. 7.5YR4/2 灰褐色シルト質粘土
2. 10YR6/6 明黄褐色シルト質細砂　地山ブロック多く含む

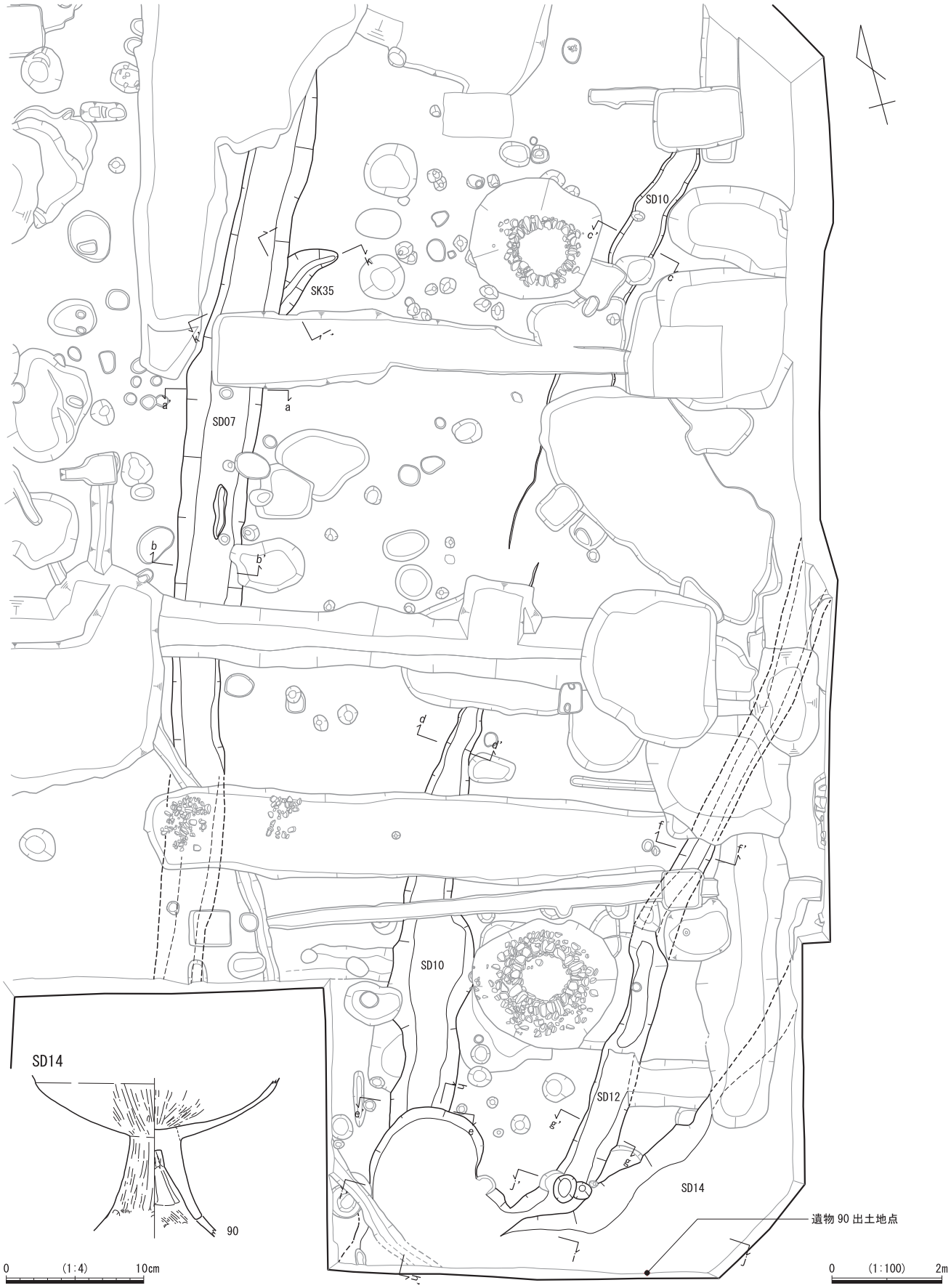


1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト質細砂　地山ブロック微混
2. 7.5YR5/2 灰褐色シルト質細砂
3. 7.5YR5/2 灰褐色細砂～中砂　地山ブロック含む
4. 7.5YR5/2 灰褐色シルト質粘土（SD01 埋土）

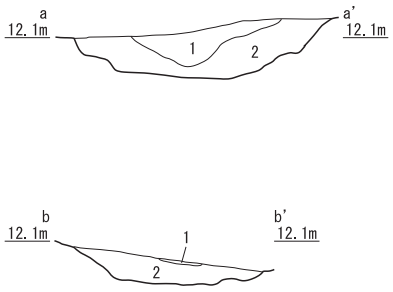
3. SD01・SD02　断面図



2. SD01 平面図

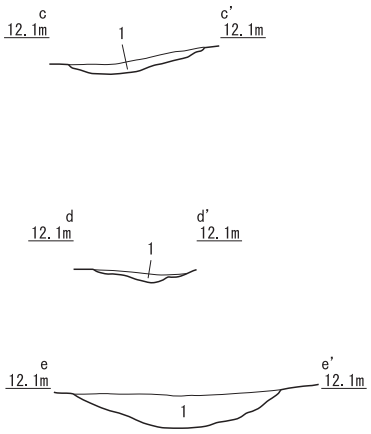


SD07・SD10・SD12・SD14・SK35 平面図、SD14 出土遺物



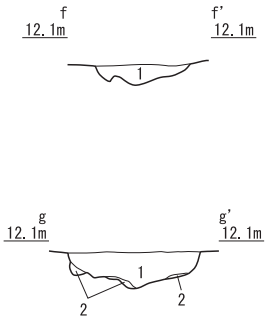
1. 2.5Y5/3 黄褐色シルト質細砂　地山ブロック含む
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細砂

1. SD07 断面図



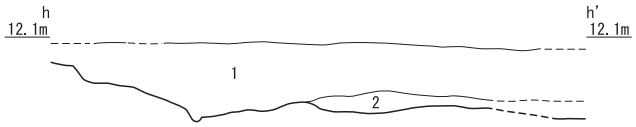
1. 10YR5/2 灰黄褐色細砂～中砂

2. SD10 断面図

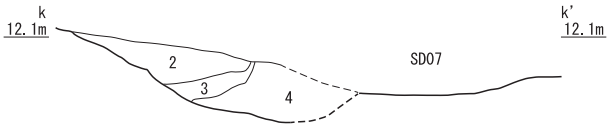


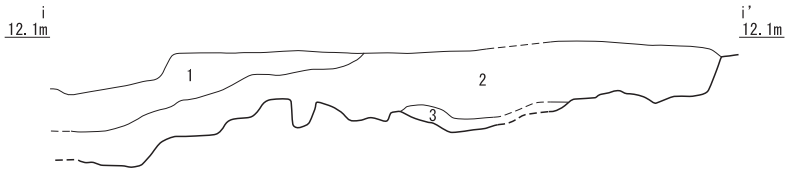
1. 10YR5/2 灰黄褐色～ 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質粘土
2. 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土

3. SD12 断面図

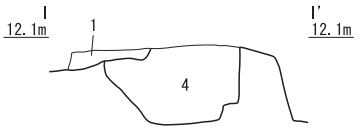


1. 10YR5/2 灰黄褐色シルト質細砂～ 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
2. 10YR4/2 灰黄褐色中砂～粗砂



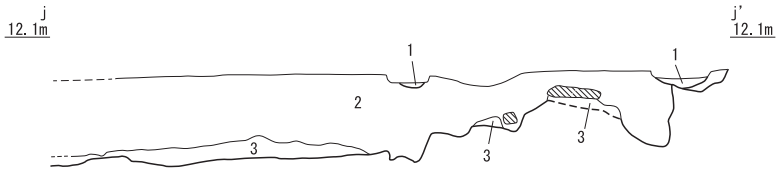


1. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細砂
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色中砂～粗砂　地山ブロック含む



1. SD07 埋土
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質細砂
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質細砂
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質粘土

4. SK35 断面図



1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質粘土
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細砂
3. 10YR4/2 灰黄褐色中砂～粗砂

5. SD10・SD12・SD14 断面図

0　(1:40)　1m

調査区全景（南から）

調査区全景（オルソ写真・上が北）

遺構写真（1）

SD08・SD09（西から）

SD08（東から）

SD08備前焼擂鉢（8）出土状況（東から）

SD08断面a（東から）

SD08断面d（東から）

SD09（西から）

SD09断面e（西から）

SD06（北から）

SD06断面c（南から）

SD06の集石（北から）

SD13（南から）

遺構写真（2）

SK17・SK22・SK23・SK27（南東から）

SK28・SK33（北西から）

SK29・SK30・SK12-2（北東から）

SK37断面（北東から）

SK28断面（南から）

SK33断面（西から）

SK16遺物出土状況（南から）

SK17断面（南から）

SK17-2・SK23断面（南から）

SK22断面（南西から）

SK18遺物出土状況（北から）

Sk12-2（南から）

遺構写真（3）

SE01・SE02・SE03（西から）

SE04（北東から）

SE04断面（南から）

SE05（西から）

SE03断面（北から）

SE05断面（北から）

遺構写真（4）

南東部下層遺構（北から）

SD02断面（南から）

SD01・SD02断面（北西から）

SD01断面b（北西から）

SD07（北から）

SD07断面a（北から）

SK35断面（北西から）

SD10（北東から）

SD断面i（北から）

SD14（西から）

SD12・SD14断面（北から）

SD14弥生土器高杯（90）出土状況（北から）

SK18出土遺物

12-2出土遺物（1）

SK12-2出土遺物（2）

出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと
書名	姫路城城下町跡
副書名	姫路城跡第388次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第92集
編著者名	南　憲和
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1　TEL（079）252-3950
発行年月日	令和2年（2020年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	兵庫県姫路市（ひょうごけんひめじし） 北条口三丁目（ほうじょうぐちさんちょうめ） 44、45	28201	020169	34° 49′ 47″	134° 41′ 50″	2018.4.3 ～ 2018.6.8	556㎡	住宅建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
姫路城城下町跡	集落跡	江戸時代	溝、土坑、井戸	土師器、陶磁器、瓦	20180006
		弥生時代	溝	弥生土器	

要約	調査地は姫路城の外曲輪に位置し、酒井時代（1749年～幕末）には南北に並んだ武家屋敷地2区画にあたると想定された。調査の結果、江戸時代前期から幕末頃にわたる各時期の遺構・遺物を検出した。また、城下町以前の時期に属す飾磨郡の条里方向と一致する溝が検出されたため、城下町の「条里ライン」に先行する区画遺構に規制された中世の遺構が周辺部に広がる可能性が高くなった。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第92集

姫路城城下町跡

－姫路城跡第388次発掘調査報告書－

令和2年（2020年）3月31日発行

編　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL（079）252-3950

発　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　内海印刷株式会社
〒670-0808　兵庫県姫路市白国五丁目8番4号